



大類
成題

五明句集

錄附
翠羽
句集





安藤和風編



類題
大成
五明句集

附錄
翠羽句集

秋田郷土會版

序

文化の風は天險を突破し、天明中興の俳風は三都より秋田に及び、固より師弟の關係その他の連絡はない。而してその巨星を吉川五明とし、斯道再興の功は、獨り蕪村曉臺等の私すべきでない。五明の句は、僅かに文政三年發行に係る椿丘太筇編「題叢」により、始めて世に公にせられ、明治に於ては、予が資料を供せし三森松江編の「俳哲五明集」と、予が小著にして秋田の巨頭を網羅せる「類題五明句集」に過ぎない。偕て五明一生の句はその自記に係る「塵壺」に、文章、和詩、片歌等と共に録せられ。門生知人等これを傳寫し「五明句集」等の名を以て個々に傳へられてゐる。然るに五明の遠裔に當る升屋柳雨は之を統制せんとし、各方面における寫本を採録して「五明句藻」と稱し、息秋風氏も之を修補し珍藏せられてあつた。予秋風氏に請ひて其手寫を煩はし「塵壺」の原名に復題し、全十二冊及び「翠羽句集」一冊を秋田圖書館に寄附し、且つ他日の出版に對しその承諾を得た。後に至り、予は五明自筆に係る少壯年時代の句集を得、加藤蓼洲氏は脱漏



せる安永五、六年分を摘録して予に供し、且つその出版を勧められた。予は炎暑を犯し、病軀に鞭うち、類題の勞苦を執り、且つ小著の遺句等を加へ、これを「類題大成五明句集」と題し、世に公にし、後に傳ふることにした。猶脱漏を圖られざるものは、後賢の修補を請ふものである。五明の姪にして、その薰育を受けし「翠羽句集」も亦類題として附録とし、女流も亦軒輊すべからざる時代の風格を示したものである。

昭和癸酉處暑松蔭舎に於て

安藤和風

例言

- 一、五明、翠羽叔姪句集は大體年代を追ひて編次し、又誤字と覺しきもの、明瞭なるもの、外はその儘にした。
- 二、句に關する長短文は之を省略し、前書も亦同様にし、又はこれを短縮し大意を示すに止めた。
- 三、句を成さず、甚だしき只言に類するもの僅少を除くの外は、巧拙を論せず務めて網羅し、九分九厘に及び大成の名の空しからざるを信ずる。

類題 五明句集 目次

春

時候

白一丁 至 四丁

年立：神の春：明けの春：今朝の春：けふの春：改まる春：江戸の春：花の春：家の春：我が春：兒の春：玉の春：初日：元日：二日：三箇日：正月：小正月：睦月：二月：如月：垂水落：氷解：雪解：春寒：春の雪：残る雪：春日：霞：春風：春の夜：春の闇：臘：臘夜：臘月：春の山：春の海：春の浪：春の潮：潮干：春の川：春の水：春の野：春の雨：春の月：長閑：暖か：暮兼：陽炎：春の暮：春盡：行く春

人事

白四丁 至 六丁

初産：様：居蘇：喰積：穂俵：筆始：論初：種俵：飾炭：稻積：着衣始：初夢：人日：七草：懸想文：猿曳：追儼：女節分：柳市：柳箸：胤：蘭玉：御忌：藪入：出代：啓蟄：初午：彼岸：二日灸：涅槃：爐名残：山燒：野燒：苗代：田振：畦塗：摘草：接木：挿木：花見：櫻狩：花鎮：雛：草餅：桃の節句：鷄合：惜春

動物

白六丁 至 一丁

猫の戀：鹿角落：孕鹿：鶯：雉子：雲雀：駒鳥：松むしり：燕：歸る雁：春の雁：引鴨：引鶴：鳥歸：親雀：麥鶉：巢鳥：蝶：蘭：蛙：蟾：白魚：春の鯉：初鱒：若鮎：田螺：蛸：蛭：蛭：寄居虫

植物

白一丁 至 二丁

福壽草：蕨の薹：初草：木青：木の芽：槐の芽：合

獸の芽：五加木：八沙の芽：梅：紅梅：梅柳：黃梅
：柳：初櫻：櫻：山櫻：散櫻：花：散る花：椿：辛
夷：山吹：海棠：連翹：藤：桃の花：躑躅：梨の花
：杏の花：唐梨の花：小米：若菜：薺：芹：薺、佛
の座：菜の花：薑：蒲公英：土筆：虎杖：獨活：防
風：末黑薄：海苔：菊の芽：菊の苗：蕨：狗背：胡
葱：韭：芹の芽：茅花：若菰：春雜

夏

時候

風薫：青嵐：明易き：短夜：夏の夜：和清天：夏雲
：夏の山：夏の海：夏川：夏野：夏沼：四月：卯月
：五月：皐月空：五月晴：五月川：梅雨：五月雨
：青田：植田：六月：水無月：夏の川：暑：涼し：泉
：清水：日焼：夕立：雲の峰：氷室

人事

青簾：更衣：綿披：袷：單羽織：帷子：蟬衣：浴衣
：香夢散：扇：團扇：夏頭巾：蚊帳：紙帳：蚊遣
：端午：菖蒲：蓬：幟：印地打：飾兜：薙べ馬：粽
：藥玉：筑摩祭：灌佛：嘉定喰：田植：早乙女：田草
取：早苗取：早苗船：照射：鶴飼：夜振：川狩：遊
流し：汗：汗拭：安居：納涼：阿井：一夜酢：沖臚
：冷麥：葛水：心太：夏座敷：簾：籠枕：土用干
：芋植：麻刈：祓：菅貫

動物

老鶯：時鳥：閑古鳥：行々子：水鶏：羽拔鳥：浮巢
：練雲雀：鹿の子：夏鹿：猫の子：夏の鶴：鶴の舌
：夏千鳥：初鯉：毛虫：蚤：枝蛙：蝸牛：蛸蟻：螢
：夏虫：蜘蛛の子：蛇脱衣：羽蟻：水馬：字書虫
：蠅：蠅：蚊：蠅：子牙：鱒：鮎：嘉魚：夏生鼠

植物

：若葉：新樹：若楓：夏木立：下闇：若竹：筍：竹
皮落：卯の花：桐の花：花橘：紫陽花：合歡の花
：梧桐：百日紅：常山花：天葵花：燕子花：花且見
：花あやめ：菱時：撫子：芥子の花：茨の花：南天の
花：梅實：櫻實：椿實：林檎：藪椿：青花椒
：夏杉：若杉：牡丹：芍薬：百合：落：青胡桃：病ら
葉：夏草：半夏生：夏萩：獨葵：唐葵：射干：葎
：末摘花：葛の花：青鬼灯：畫顔：苔の花：蓴：萍
：藻の花：蘭の花：夕顔：河骨：蓮：青つばら：葱の
花：刈葱：葵喰草：茶先草：麻：はきき：山苳
：眞菰干：夏大根：角豆：馬鈴薯：瓜の花：眞桑瓜
：水瓜：茄子：茄子苗：南瓜：朝顔苗：海松：蓮根堀
：夏雜

秋

時候

立秋：六月：八月：九月：今朝の秋：秋の日：朝涼
し：新涼：秋涼し：秋暑：殘暑：秋初：初秋：初風
：初嵐：秋雲：秋聲：秋の風：天の川：稻妻：稻の
殿：霧：露：三日月：名月：今日の月：月今宵：月
：無月：十六夜：小望月：後の月：秋の雨：秋の山
：秋の野：秋の夜：長き夜：夜寒：野分：秋の暮
：秋の夕：初潮：秋潮：秋の川：秋の水：落し水：秋
名殘：秋の霜：露霜：秋の末：秋盡：行秋

人事

八朔：田面の日：九日：花火：星祭：七夕：刺鯨
：魂祭：墓參：魂棚：生身魂：送火：聖靈：燈籠：高
燈籠：切籠：茄子祭：芋殼箸：躍：盆：接待：秋彼
岸：相撲：月見：稻刈：稻鎌：稻舟：今年米：燒米
：今年糠：秋蚊帳：砧：鷹打：鳩吹：漆搔

動物

鹿：鳴：雁：歸燕：稻雀：鶴鴿：鶉：尾越鳴：出掛
鷹：初鷹：鷹別：鷓：蝸：虫：蟋蟀：螻：蝻：鈴虫

餅：蚊帳：蚊遣：打水：川遊び：團扇：竹婦人：抱籠：晒井

動物 時鳥：水鷄：青鷺：螢：夏虫：蟬：蝸牛：水馬

植物 殘花：若葉：葉櫻：櫻の實：若楓：夏柳：橘：南天花：夏木立：卯の花：若竹：竹の子：牡丹

芍薬：燕子花：花菖蒲：玉卷芭蕉：茨の花：撫子：石竹：苔花：麻：藻：蓮

秋 自七八丁 至八〇丁

時 候 夏殘：秋立：初風：朝風：天の川：つめたき：秋の風：秋雲：霧：露：秋の山：花野：名月

月：桂の花：秋の暮：秋時雨：小春近：秋錦：秋され：秋名殘：行秋

人事 星祭：立琴：織姫：鶴の橋：魂祭：毛見：月見：稻刈：刈田：茶種蒔

動物 蠶：秋蟬：虫：松虫：鈴虫：秋の蠅：鹿：渡り鳥：色鳥：五十雀：鶉：雁：鶯：鶯鶯：鶯鶯

植物 朝顔：萩：萩桔梗：薄：尾花：萱：紫苑：菊：草の花：男郎花：女郎花：角力草：紅葉：木の實：栗茸：茸：粟：今年豆粉：秋雜

冬 自八〇丁 至八二丁

時 候 小春：小六月：冬日：冬月：冬の海：時雨：風：霜：霞：雪：寒：薄氷：氷：師走：春に返す

人事 鉢叩：煤拂：年の市：春待：厄拂

動物 鶯子：千鳥：鶯鶯

植物 木の葉：冬木立：寒の梅：水仙花：枯菊：柘の花

作者小傳 (三輪翠羽) 八二丁

目次 終

類題 大成 五明句集

安藤和風編

春

時 候

年 立 孫兒三人にほだされて 年立つや我も目出度き物の數 本卦に返り

立つや年既に白髪の緑り兒ぞ 伊勢より唇と共に送られ

神の春 其儘に神の春なれ白拍子 難波の長齋より梅の小枝を贈られ

明けの春 文に込めし此の花や此の明けの春 今朝の春に堀らばや落の臺

今朝の春 今朝の春我が軒に蓑の塵掃かん 難波の鶯雪より蜜柑を贈られ

けふの春 飾りせぬ草の庵もけふの春 六十三の春を迎ひ

改まる春 力しき杖を七九の年の春 改まる春の物には素土器

馬丁の江戸に行くを送る

江戸の春 江戸の春花は成美か道彦か 先づ春よ世間よければ華の花

金龜堂湖翠に

家の春 柚麩にもあらん袴の家の春 我が春を人して呉れつ齒一枚

兒の春 七十を捨て、一つや兒の春

舊年孫兒を儲け侍りて

玉の春 石蠶草や子に子殖え行く玉の春

初日 天が下襟垢附かぬ初日かな

有り古るも初日につれて宿の松

ぬかづきて向ふ初日や米の飯

垂るは垂るは軒の垂氷の初日影

元日 元日の夕日や酔へる人の顔

元日のすさみに唇讀みにけり

元日や一つらとなる雁の聲

二日 梅既に月も綻ぶ二日かな

元日も二日になりぬ三日の月

炬燵より出て見たれば二日哉

三個月 三個月過ぎて抜けけり桶の凍

誰々も正月顔になりけり

正月や一ふり雪の東山

正月や晦日なけの人の顔

蒸し梨も正月物の餘りかな

小正月 冴返る夫婦喧嘩や小正月

陸月 河豚喰ひの淋しさうなる陸月哉

二月 棉弓や二月の雨の小家並

鶯の寺より出つる二月かな

春寒較花遅

火桶抱いて二月の梢見る侘し

白喬亭

如月 梅の木よ目覺ませ既に如月ぞ

如月や誰我が袖を引きにける

如月は昂に咲くや福壽草

如月や柳の見ゆる夜の雨

如月の霜や圃の荒起し

雨とても京の事なりきぬさらざ

如月や蛙の鳴かぬ水もなし

如月や呼ばれて歩行く京登り

暖宵

垂氷落 雨に聲なしつららの落る音折々

氷解 杜陰や風まだ氷る枯柏

うは解の氷に遊ぶ小鮒かな

流れ来て水を碎く氷かな

雪解 雪解けの胡葱畑やぬた脛

石橋の水にしづまる雪解哉

玉垂る、九輪の雪の雫かな

松原の静かや雪の忘れ水

雪解や割木の上の柜米

湯畑や雪のあとかく竹把

春寒く京へ云ひやる事もなし

雪光る春の田中や鱈堀り

あちむらやむら立つ春の雪曇り

残る雪 村口や蕎麥殻見えて残る雪

残雪や恐ろしげなる杳の跡

残雪や末枯葱の砂島

残雪や茶山寺家の煤障子

残雪に干菜煮る香の浦千鳥

残雪に水雞のさくど歩行見ゆ

残雪や脆くも宵の電

永源院にて

春日 春日の日の寛溢るる日和かな

鱒はねて光り目に入る春日哉

小坐當の白目明けたる春日哉

春日の日や水にゆり出す龜の面

御守の書せ給へる弓矢神の壁軸を拜み

春日影氣高き墨の光かな

霞 梅あれば放し兼たり春日形

源氏繪の入りぬ所を霞かな

薄霞立つや野中の一里塚

包まれて日の大さよ朝霞

荒海の波をのしたる霞かな

直になる雨にからまる霞かな

象潟や森の流るる朝霞

繪に霞む家一つある野松かな

雪隠も隣も遠き霞かな

柳見れば柳になりし霞かな

薄霞肥行く雪の絶間かな

松原や霞に落る雪の音

松原や山を載せたる一と霞

若雪の霞に積る梢かな

島島や霞の下の一青み

霞引く千鳥や浪もなごの海

日を待て海に佇む霞かな

流行るものは何そと江戸の初霞

水戻る野川に霞む鳥いくら

とんど焚く匂ひ棚引く霞かな

朝市や霞の下は青きもの

春風や小川に餘る水の幅

春風に狂ふ人皆猿の聲

春風や田の畦走しる犬二匹

春風や木の葉の下の溜り水

吹くぞとも見えぬ空かな春の風

春風や空に含める山の色

春風や小鷹据えたる御曹司

春風や町家へ這入る迷ひ鹿

春風や高脛白き刀もち

春の夜 春風や長き物着て蚤乙女

米搗の髪も光るや春の風

春風や京へ這入れば春の風

春風や土器作るあたりさへ

有明や連歌戻りの春の風

春の夜の夫とも見えす電り

春の夜を流るる舟の鼓かな

雨を持つ春の夜鳥聲ゆるし

春の夜は無きにも月の思ひせり

春の夜に開かんものなら鉢叩

春の夜や鐘より鐘の音ばかり

春の夜や心の隅に戀作る

春の夜や人の聲ある鹽烟

春の開額に物のうかかはし

ことごとく蛙鳴く夜や水臙

臙經て十とせや白髪物語り

有明や臙をゆする海おもて

水は臙家際の鴨の鳴寄るや

顔を吹く風さへ臙なる夜哉

臙夜や氷放なるる岸の音

出て見れば臙に雨の降る夜哉

川中や頼鳴き歩行く臙月

薄暮望連山

春の山 夜境や丸う連なる春の山

春の山人を力に登りけり

春の海見つ、喰ひ行く煮蛤かな

春海のあな(あな)うらに貝のこそはゆし

春の浪 立つを見る春の沖浪夫れば鳥

江 蚌

春の潮 象潟を牛に漕ばや春の潮

潮 干 岩清し窪みに三日の忘れ潮

春の川 浮鳥の仰のけに鳴くや春の川

春の水 山水や雲の下行く春の音

浦々や月をかかへて春の水

いな光る春の夕水音もなし

春の野 春の野や草の途絶えの砂濕めり

薄州老人を訪ふに

春の雨 春雨に目鏡をかけて軒かな

灯も暈さる 春の夜雨哉

山は山に顯はれて春の雨の降る

春雨の花にも換ゆる 枕かな

春雨や 虱 鮫 鱧 安房 鱈

津輕の吳江に

春の月 春の月物言ひ足らぬ別れ哉

水の上に城の浮きけり春の月

たしかならで床しき春の月夜哉

我が足にいつか潮來つ春の月

醉起步 淡月

醉ひし脛水寒からず春の月

春の月馬ある里を過にけり

木にとまるものなら千鳥春の月

我見えて人や立ちけん春の月

春の月物被りたき浮世かな

春の夜の月やいくらの戻り馬

角のある鹿さへ丸し春の月

静かより傾き安し春の月

吾長妻を悼む

打見れば老の眼がらか春の月

長 閑 長閑なる物の一つや織沙賣

長閑さを聞に出てたり一里鐘

大塚にて

暖 か 釣鉤の片面や日の暖まり

新潟のぬたりを渡る時

暮 兼 暮兼ねし佐渡や夕日の油皿

閑 窓

陽 炎 枯竹に虫の陽炎ふ軒端かな

雉子鳴く茶山の雪も陽炎へぬ

山笹の雪突落ちて陽炎へぬ

川口なる其平公野庭

青石や苔もふるさず陽炎へぬ

陽炎にかしらの霜のつれなさよ

先祖法 筵

陽炎の世に有難し百年忌

陽炎や渡らば落ちん橋の上

前 書 略

陽炎に蓑虫 動くけしき哉

春の暮 春の暮砧うつ、や夢なるや

美 丸 追 悼

玉を石に打つやうつ、の春の暮

侘しらに春盡れども古茶 吸

行く春 行く春を尋ねて蝶のあなたこなた

望 雄 鹿 山

春や行く島山 青く鳥霞む

行く春や杖につくく竹 箒

惜まる、春の行衛や嵐山

宗 盛 熊 野 賛

行く春や鶯が鳴いても雁と聞く

行く春や何を捕へて惜むべき

人事

初 離波の長齋より住の江の姫松を贈られ
住吉の松葉くゆらせん初竈
標も果ては烟や竈の下

嘘一醉顔に對す

標の苦きを噛むや二日酔
標も佛のものに呉れにけり

金亭より周魚莫ければ

屠 鯛の色にならぬや屠蘇の初坐敷
喰 草の戸や喰積とても貫ひ物
喰積も人の恵みや草の庵

前書略

穂 穂俵の其の粒々は我が年か

歳且

筆 始 月花や柱隠しを筆始め
いてや今朝米粒に筆試みん
初 山伏や里の子よせて謠初

百姓に大黒の畫讃を望まれ

種 俵 此の上に寶ごてなし種俵
飾 炭 打よりてほぐし初めけり飾炭
稻 積 稻積むに雉子も來ぬるか庵の松
着衣始 紋附を人がましやな着衣始
初 夢 初夢や富士よりは先づ吉野山

崑山氏の初夢を賀し

人 日 初夢に上なき山を三保が崎
人日や醫者のつれたる刀差し
人の日や衿着て手を打違ひ
人の日は長きと思ふ始めかな
人の日も暮れて鴨喰ふ菜芹哉

七 草

七草も晝になりけりところ賣
七草やから火焚き立つ台所
草の戸も七日は粥の始しめかな
七草の屑かいやらん馬の粥
七草や大戸を明る咳拂ひ

土崎にて

海草の七色も亦珍しや
七草や七つの星を見る七つ
七草や三草ばかりは庵の物
七草を七つに起きて又寝かな
小さくてあれや若葉の粥柱
若菜粥よしや八日も九日も

懸想文

懸想文行燈拭いて仕舞ひけり
猿曳が寝たよ酔たよ柳蔭

追 儼

君が春豆にためらふ鬼もなし
逐はずとも鬼はあるまじ斯る世に

女節分

まかなくに何を女の節分よ
打擔ひ行くや霞の柳市

柳 市

降りながら雪も霞むや柳市
改まる春の物には柳箸

柳 箸

越す越さぬ矢矧の橋や風
幼な兒の帯に結ぶや風

風

暮残る子供や空に風
城下や空にならふる風
一と垣や屋敷くの風
御秘藏を人に見するや風

前書略

引く人のあればあがるや風
繭玉や柳しだれて星月夜
轉た寝や繭玉落る夜の雨

御忌 何かなと思ふ折しも御忌の鐘

入 藪入や寝た子を妻の膝移し

出代 やさし木に花も咲くものを

啓 板壁や割目這ひ出る盲蛇

初 初午や子供まかせの村の神

初 初午の一番富や藏の鍵

初 初午に今年の扇拾ひけり

初 初午や何處ぞでけふは喰うたもの

彼 初午やこゝらの里は田螺操

二 十處で同じ物食ふ彼岸かな

日 我が知れる人もありけり彼岸諷誦

灸 臍灸や窓の柳に香を結ぶ

二 譽られて喰ふや二日の灸祝ひ

灸 灸する様や蛙の背中つき

百 百千鳥鳴くや佛の肱枕

涅 涅槃會やされば抜けたる齒一枚

降 降る雪の地にも止らぬ涅槃かな

涅 涅槃像眼鏡に曇る涙かな

脈 脈のなき顔とも見えず涅槃像

我 我が茶釜涅槃なりとて泣くやらん

年 年々や見る目にうとき涅槃像

涅 涅槃像兆溪明を涙かな

爐 爐の名残静に堪へし曇り哉

山 山焼や臚に籠むる遠明り

山 山を焼く夜頃ひた行く雁の聲

野 雪凄く残る焼野のたるみ哉

何 何處となく野を焼く匂ひ腹減りの

苗 苗代の一枚古き簾かな

苗 苗代や静まる水に山の形

田 馬牽て歸る田搔の欠伸哉

蛙 蛙塗るやあまねく照す曦

摘 何摘むぞ爰等の女ども見えす

壽 草摘の膝行く歩行む莖切れ

接 着く迄を樂しむ老が接木哉

挿 木 さしてさへ咲くを老木の是非もなし

花 捨てられて徹書記思ふ花見哉

見 しみくくと夜の花見や醫師達

我 我が鐵槌を笑ひける人に

い いくこまで花見に行くぞ蛇藥

い いくこまで花見に行くぞ筒脚絆

大 大名の芳野 吉原櫻狩

題 此の門に誰や書せん花鎮

句 華鎮とろ、汁とぞ聞えける

主 夫婦ぞと書くや雛の足の裏

謙 いはけなや物甜る兒の雛祭

雛 雛祭見るや見ぬ世の光る君

箱 箱入の娘も見たり雛祭り

花 花來が妻身まかりければ

雛 雛一つ轉ても悲しや二日の夜

住 住めば都雛のお物に田螺盛る

前 公家衆の細工なりとや雛の花

書 隠すべき夜の物さへ雛祭り

前 辻店や誰か涙の古雛

少女を見るに

雛祭り盆三日より哀なり

草餅 野の色も斯くはなりけん草の餅

桃の節句 清酒に母子も節供や桃の花

鶏合 桃柳馬鳴く家も節供かな

三合にして止めし鶏合せ

鶏合 御庭の櫻咲にけり

惜春 けふ限りの春を惜むや嵐山

鳥還人亦稀

暮れて行く撞樓に春を惜みけり

動物

猫の戀

こと妻に耳や取られし猫の聲

猫の妻濡身で来るや夜着の裾

戀止みて墓に忽ぶや寺の猫

呵られて低う鳴きけり猫の妻

猫の妻日半の眼ざし哀なり

猫荒る、遠電する夜かな

春の猫鳴くく橋を渡り行く

浮れ出す猫や氷柱の落る夜に

死んだかと思へば戻る男猫かな

何處でやら眉書れたる女猫哉

耳をこするそが粧ひか猫の妻

春の猫轉ろげる麥のあたり哉

前書略

撫らる、身を汚しけり春の猫

翠羽が忍ぶ名の猫の戀に對す

戀ふる猫戀せぬ時の聲もかな

空鐘や雪はふれ、と春の猫

三日ありて戻りし猫の異見かな

竹裏亭

鹿角落 鹿の角落てもあらん樹込かな

孕鹿 孕鹿日たけて起る哀なり

鶯 閑庭

鶯の水汲ませぬや庭の井戸

鶯や枝の雫に身を細め

鶯や糊は雀に喰はれけり

鶯の小さき口に月星日

宜祥庵に出る時

鶯や雪間かけらふ笹の中

鶯の鳴く時背中ひらめけり

鶯や笠に糞する石燈籠

菅神奉納

鶯や鏡にとまる梅の影

鶯の聲聞く空になりけり

鶯の林にあたる高音哉

鶯の何を見そめて鳴にけり

鶯の川越して行く眞晝かな

鶯の聲に寒さの放れたり

鶯や入日見かけて聲きざむ

鶯や舟に出そめん硯箱

鶯の鳴れぬ空を初日かな

鶯の放れぬ里の静知れ

鶯や雪より出て、聲青し

鶯の聲やあかつきの一はづみ

鶯の獨り遊びぞ奇麗なる

聲あらばあれ鶯の翁塚

鶯の來て居れば我も居にけり

鶯に衣流したる女かな

鶯や京に入りたる日の心

鶯に薫たかん石の上
 鶯や女院の翠簾に眼の籠る
 鶯の尾羽にはぢるや雪の露
 鶯の梅若に行く舟やある
 鶯に泣もしつらん啞か親
 鶯に目を合せたる朝戸かな
 二日來て鶯も來ねば團子もほし
 人も着る鶯色や聲の頃
 鶯に軒の干菜を取られたり
 鶯の晝寢に入るか竹の中
 鶯の尾を反したる日和かな
 鶯や細き眼をして物さとき
 鶯や心もふらず大屋敷
 鶯の初音支度は首ひねり
 鶯も尾羽つくろひや口ひらき

鶯々舎に宿る

鶯の巢を見る宿り静かなり
 鶯の住む竹杖に貫ひけり
 眉痒き日に鶯の來鳴いて
 尾を立て鶯梅に移りけり

素大旅の青冊に序し

鶯の巢を飛出たり時鳥
 鶯は聞後れても初音かな

東箱へ何ひ数々の下され物あり

鶯の聲をもけふの賜物よ
 鶯に齒のあるものならば白からん
 鶯の何處にも行かぬ木を欲しや
 鶯の來れば梅ほし柳ほし
 鶯の見もし見もせぬ顔すなり
 鶯に雪の下なる草見せん

鶯や寺の難煮は二十日過
 鶯や鳥の柳いちと遠し
 鶯や能く寝て起きし朝ほらけ
 杖なしに今日は出しぞ鶯よ
 鶯に佇めど足は進み行く
 鶯の二つ來る日や天赦日
 鶯の笑壺に入るや茶振舞
 鶯の初音聞たよ鯛買はん
 仰のけばいと、に黄なりき鳥
 鶯よ蛆の飯喰ませうぞ
 鶯に寺の料理を喰ひにけり

かくまへし女里に行きければ

鶯や花なき木には居らぬ筈
 鶯よ我が孫にせん彦にせん

五節舞の讚

鶯の何を見るらんどり兜
 鶯よ止まれよ是も梅の枝
 鶯や里渡りする七辛子

泉州佐野の右稻二條殿より宗匠號と裝

東中啓を賜り御詠の短冊を拜せしとて

雉子
 氣高しや花の雲井の匂ひ鳥
 石山の崩れかゝるや雉子の聲
 笹原や折々雉子の伸び上り
 野の末の月に雉子のかしら哉
 雉子鳴く風の野柏暮にけり

山家

日の暮や犬に追はる、雉子の聲
 雉子の聲木魂も尊し神林
 雉子一つ走せて見えけり四つ五つ
 見て居れば雉子の眠りの移りけり

蝶

當國に年を重ねて彌生の頃松島へ
と振り切り立れたるに
氣の合ふは蝶や花より花の奥
島原の屋根傳へ行く小蝶かな
石山の石に角となし飛胡蝶
草の戸は晝寝にどまる胡蝶かな
兎角して扉を越えける小蝶かな
風に落ち風に飛たる小蝶かな
着の儘に歩行くや蝶の遊び旅
行く水と蝶は何追ふ吉野川

隱居に倦みて

蝶飛ぶや誰を誘ひに来る 日和

阿仁なる三子に

蝶々の何嗅きあるく里傳ひ
裏道や泥にもふれず飛ぶ胡蝶
蝶遊ぶ静かや雨の降りか、り
一つ二つ蝶見えて人見えにけり
しつかりと蝶見えて人見えにけり
何なりと蒔けや畑に蝶見えつ
高飛の蝶に紛る、蝶もなし
蝶吹いて起さばや花の朝朗
初蝶や麥の間を吹れ行く
翠簾の蝶如何なる香をや聞くやらん

來翁遷化

窓に來し蝶さはそれは佛か
蝶の子にか、る毛虫も浮世かな
蝶飛んで馬上の人をさ、へけり
蝶につれて行きつ、見れば小町塚
可來書畫帖に

蝶とぬる草の枕よ風引くな

忠臣藏書畫七段目

捉まへて小蝶に酒を飲ませばや
舞ひ出して我を忘る、胡蝶哉
縄れ來てあぶなき蝶や淵の上
笠を着て蝶嬉しがる女郎哉

題 山 寺

蓋取れば蝶の出るや般若櫃
蝶の來るは花に呼ばる、さいさきか
蝶々と背戸から來るは來安いか
笛吹て蝶よする人奇なる哉
火を問へば山藪取の宿りかな
百年の庭の古びや鳴く蛙
加茂川を捨て、田に鳴く蛙かな
川形に曲る蛙の鳴く音かな
日の昏や石つむ間に鳴く蛙
二つ三つはまさに聲する蛙かな
蛙鳴く此の一と里や通し水
扉あはひやつる、聲なく鳴く蛙
雷の中に聞きけり初蛙

野莊に遊びて

夕蛙一つ鳴くより三つ五つ
月の中につら出す小田の蛙かな
月もなく人も來ぬ夜は蛙かな
橋守がうとき燈に寄る蛙かな
水かつぐ畑に鳴込む蛙かな
新川や澄み行く水に鳴く蛙
蛙行くあとや廣がる土油
何心なきに蛙の一つ聲
片鳴の蛙ものうし扉の際
三聲四聲蛙鳴きけり竹の中

蛙 藪

水こむる聲朧めく蛙かな
初蛙槭こもりして聞ゆなり
蛙夜只鳴くや山火の遠明り
しこり鳴く蛙や水の明けくらみ
蕨粉の槽濁し行く蛙かな
明くらや蛙の崩す鳴の聲
濁江も夜は澄むらん鳴蛙

素大に

風暮て湖は只蛙鳴く
水に浮く蛙や思ひなき姿
水籠る田毎の蛙や夕くもり
晝の蛙聞濟ましては友鳴す
聲吞んで人を見送る蛙かな
蛙鳴く夜頃湖水の月そ月
草の戸の留守に鳴居る蛙哉
草の戸や灸する夜に蛙鳴く
蛙鳴く夜の衣は着もし着す

忠臣藏書十一段目

かけ槌の下に鳴いたる蛙かな
山中や朽木の水に鳴く蛙
水滴に來て並びたる蛙かな
鳴そむる蛙やさては十五日
蛙二つ送りし人が立聞す
鳴く蛙草の戸らしく住なさん
散る花をいかに蛙の空目かな

驗者

あな淺間し蛙の聲を封しけり
鳥居ある町や蛙の向ひ鳴
押し乘せば舟に飛乗る蛙かな
捨果る身にも蛙の鳴く夜哉

白蟾魚

昔し思ふ目洗ひ川や鳴く
千町田や片曇りして鳴く蛙
水澄むや夕田の蛙夕鳴す
里際や木戸さし頃の鳴く蛙
入る月や根木に並びて蛙鳴く
あさましや蟾に吞まる蝶の羽
白魚や心遣はぬ子供客
白魚の白きを見れば夜明かな

客の來れるに

白魚に鶴の油をからんかな
白魚の白き間も暫しかな
白魚の尾緒あるこそ哀なれ
我が頭ら白魚多く喰ひしにや
白魚の心や元の水の泥
白魚も知らずわが菜はたけて行く
白魚や到れば青き海の色
白魚に五文ほしいよ四文錢
白魚や老て契らへものは是
白魚に欺かれたる鮫鱈かな
白魚や親もてる人子ある人
春の鱈佛の寝たる形かな
初鱈や柳は垂る、梅は咲く
若鮎や水の底行く夜這星
渦を巻いて底に休らふ小鮎かな
若鮎や水は風吹く瀬の早み
二三尺這うて田螺の日暮れたり
砂山や田螺這うたる人の跡
市に出て烏芋と別る田螺かな
淺水や田螺片寄る日のあした

田螺

春の鱈
初鱈
若鮎

現はれて春の空なる田螺かな

前書 畧

泥に飽かぬ身こそきたなき田螺かな
喰らふまじ煮らるゝ田螺鳴くなべに

八十七の母に

蛸

飯蛸の飯參らせん老の母
春もまだ蛸小さし薄水

象潟産なりとて送られたれば

腰たけの鶴やふみつる蛸にも
ゆれ寄て清き蛸や潮境
見え乍ら腕屈かぬ蛸かな

象潟

やごかりに蛸囁やく柳蔭

贈られし築螺の中に交りければ

寄居虫

やよ寄居虫梅の小枝を持たせうぞ

植 物

福壽草

八百屋からよきもの來たり福壽草

時に後れて

如月は畠に咲くや福壽草

信濃上田雲帯八十八の賀に

落の臺

いつまでも咲候へや福壽草
捨てらるゝ花に香はなし落の臺
苦いとは見えぬ笑ひや落の臺

自得

初 草

よしなしや老て花咲く落の臺
伸び過ぎて淋しくなりぬ落の臺
落の臺苦くも見えぬ笑ひかな
初草の爪枯れて見ゆる哀なり
初草にひとへの霜や衣かつき

礎 一 に

木 青

初草よ寺の男に抜かるゝな
水満ちて里々の木々青やぐや

木 の 芽

朝かげや雫芽にもつ小柴垣
賤の子を哀む

穂の芽

なれも子ぞ皂角の芽の梢摘まん
穂の芽や鹿忽に摘んで笑はれし

合歌の芽

芽出しさへ眠たき合歌や小雨ふり
妹が摘む五加木に尖のなくもかな

五加木

みごる物の中に八汐の芽出し哉

八汐の芽

洛聖願寺の梅二章の内

梅

梅が香を隣に吸ふや蛸薬師
雨一夜きのふの小豆梅の花
一二輪梅咲きにけり海老の髭
客まふけするとして

梅白し急に疊の表替

咲かれまい處に梅の一二輪

朝影にかけらふ梅の匂ひかな

睦月二日老母の別業にまかりける
に早くも別ものけしきも見まほし
きなど語り申され侍るに

けふに成つて梅もとかしく思ひけり

目さまして屏風押やれば

浮き立つや梅に旭に鳥の聲

さる方にて

月漏るや梅一重の破れ垣

前書 畧

遠山の梢に寒し梅の花

雪されの山家の軒の梅の花

忘れずに老木の梅の咲にけり

二月朔日國の御守の野莊へ入らせ
らるべきよし聞え侍りければ

敷きならず砂や梅ある處まで
野の梅にさしか、りけり月の暈
突棒も刺又もあり梅の花
土升や梅の盛りの家工
梅屈て小さき花の日は哉
老梅のかるくしよ風の声
花に目を放せば梅は暮にけり
山中や毛皮さげ置く軒の梅

梅歴寒苦發清香

老ぬれば汚なきものを梅の花

聞 怨

君來すば梅白く只月白し
何處折てよき枝もなし梅の花

憂方知酒聖貧覺錢神

梅の月徳利走らす妻もかな

昨日より今日又白し梅の花

梅咲けば咲くごとて餘所も見たき哉

餘念なや鼻さしつける梅の輪

丹霞堂庭ひろめ

苔なしむ梅や杖つく老か友

鶯に飛石据えん梅の花

斯く計り春にも馴れず梅の花

梅凄く吹きすむ風の日暮かな

前 書 畧

梅と我と年同じうして我老たり

梅によれば月も佇む野中かな

人來るは世間も梅や咲つらむ

多からんよりは老木の梅の花

散る梅や日は入相の麥の上
梅が香に捻ぢ忘れけり龍の口

蕉門の句を問はれ

作らぬも作るもわるし梅の花

臂かけて梅に心をゆられけり

梅の露目弾きするや日の光り

小さい手に算へさせけり梅の花

瓜六子止善

目柄かや皆雫もつ梅の花

是齋齋炭籠に

菜や摘まん梅折入れん手籠かな

幼子の前齒や梅の開きしに

梅咲きぬ目のほひるたる人訪はん

ねまりたる家あり梅は盛りにて

梅得と暮て散行く童かな

我が家の梅の遅きに灸せん

前 書 畧

鯉作る我に池なし梅の華

降る雪も香やよふるらん梅の花

梅一輪そと落ちてあり青壘

鼠鳴く夫さへ聲よ梅の月

風鎮に梅を漏る日の光り哉

匂ひより見れば見ゆるや闇の梅

梅光るあした下駄かよ草履かよ

誰殿の葬禮なるぞ梅の月

梅白く吹込風の日くれかな

前 書 畧

梅が香に探る茶碗やつちめくり

かく計り春にも馴れず梅の花

梅既に半ばなる香の月夜かな

古小袖人には耻ちず梅の花
こぼれてもく梅の盛りかな
梅咲きぬ釜の高煮ぞそぞろなる

田家の富

年古き梅あり秣積める家
梅々と申せし梅も葉になりぬ
斯く申す我は七十梅笑へ

酒好む人に

梅の花吹て咲かすや酔心

茶をする人に

茶園の物好見ばや梅の月
雲隠は目にもかゝらず梅の花

東館より拜領物

玉鳥のたまもの附かん梅の杖
百年あかたちめでたし梅の星

舊臘二十七日國守より賜はりし懸物を
掛け併友を招ぎ

梅も咲け君の賜物けふ開く
里の子や梅の日暮と鳥飛ぶ

米借りて食ふ日もあれど梅の月
牙婆等や梅の小土手に息をつく

米粒に物書く人や神の梅

懷中曆を送られ

鶯の鳴く日もあるか梅曆
誰殿に關札なるぞ梅の月

梅植ゑて隅田へ廻すか料理店
梅咲きぬ御顔てらつく撫佛

梅の旭蓓の宿も光りけり
一つ咲きし梅のあたりを立めぐる

下戸に惜し梅の木の間をもる月夜

長齋

難波津は空も近いか梅の花
富士近くなり得し甲斐の梅の花

よき隣持ちけり梅に鳥の聲
家毎に咲けども梅は珍らしい

小姫等が来りければ

蛤に幾つ、めたぞこぼれ梅
近衛書く人懐かしや梅の花

散り盡きて又一二輪梅の花
骨接木や梅咲かぬ間は梅の花

源氏の畫へ

梅の露笛をどふすやうつし人

畫 讚

老梅の靈芝に花の露清し
梅の雀竿にさゝる、日は何日

月落ちて風眉を吹へや梅の蔭

聖廟九百年

あまみつや千年に近き神の梅
初梅や物美まぬ心にも

梅に向けて建てばや机置く處
先つ以て梅は咲きけり歩行かばや

梅咲きぬ髭を剃らうや延さばや
梅咲きぬ椽に上げたる犬の脛

小雨しぬ梅を相手に茶の湯せん
今日も又翻れし梅や手一合

面着けて物言ふ迄や夜の梅
梅の花白かね町にこぼれけり

紅梅に潮風よける簀垣かな
紅梅やけふと思へば早や夕

紅梅に世のうつろひを思ふ哉

紅梅

題

梅

月奇なり柳によれば梅によれば

前書畧

俳諧は此の中にあり梅柳舟は出る渡口の柳梅の花梅柳世はめてたくぞなりにけり青柳や梅は冬の日炭俵二つには友にもよるや梅柳

十二歳其龍追悼

梅

去年枯れし櫻悲しや梅柳黄梅や見飽かぬ庭の物の蔭闇の戸に押はさまれし柳かな青柳は跡へ繰るなり水車川の口明くや柳の初か、み

賀有中改號

底清き柳のかげや抱ひ魚風止みて木振り定まる柳かな

野亭夕雨

青柳の雨に細れる夕かな風枝を打て氷を砕く柳かな四五本の柳の中や薄烟

前書畧

山路来て柳こほる、流かな水の日の柳にうる、動き哉牛隠す柳も春の簾かな

春風春水一時來

青柳や風なく水も動かぬ日夕虹や入江のへりのむら柳夜放れや柳を傳ふ川曇り水ゆるく夕川柳しだれたり

白日依山黃河入海流

日は山に盡きてしたる、柳かな濱崎やそれと柳の見ゆる頃腰かける石がな一つ柳蔭裏門は水も流れて柳かな夕晴や柳にこぼす鶯の聲味噌桶に水を張込む柳かな青柳に笠着て雨をふむ子かな行きさまに猫のくはゆる柳かな青柳や日のさ、ぬ日の夕たるみよりか、る家面白き柳かな叱られて舟に垂たる柳かな綱引の酒になりたる柳かな米搗のまつへて結ぶ柳かな

畫 讚

燕の美人を招ぐ柳かな樓の琴雨の柳の聞き居るか城下の地勢放れて柳かな

畫 讚

醉ひやしつ柳啞はへて人狂ふ鶴下りて柳はいと、柳かな

柳陰待燕

燕遅し柳はひとり柳かな鯨焼く火にしたれたる柳かな藪の香や柳ほこるる裏鳥居何かくと柳に筆を結びみん青柳や泥にまみれて諷あり日の影の糸に裂けたる柳かな宿假りも宿を出あるく柳かな田の中に鳥の立たる柳かな白賣と共に休らふ柳かな

青樓半醉曲

引けば来る放せば外る柳かな
青柳の淺黄になびく里烟

前書略

田螺もむ女つくはふ柳かな
磯べたの柳目を釣る眺めかな
野渡りや柳かぶつて家一つ
東雲や柳を含む里曇り

女郎と野郎と兩手引かる、僧の畫に

轉ぶ時力にならぬ柳かな
鶯に柳ある隣頼もし、
水かつく小崎の柳夕すみぬ
此のあたり知る人ほしき柳哉
青柳や旅はよき馬朝ぼらけ
終ひ其處と見ゆる柳や廻り道
水延て里放れたる柳かな
馬替へる人を宥める柳かな
放せとて柳戦くか放し龜
柳とても絆しがましや草の庵
うつり行く柳の月やたらし船
雪無く鎌倉を禁ぜられ

入口に提灯さげし柳かな

快晴

今日はとて柳目當に出にけり
よく垂れし尺八寺の柳かな
氷より柳離れて魚そよく
是とて春のものなり鬼柳

芝引樓邊

常に見れば常かよ柳川の水

川口

青柳の中に籠るや船祭
糊紡の相手に門の柳かな
船橋や大名衆の待柳
みちのくの二里は途ひ其處柳かな
駕の戸を明ける處に柳かな
薄雲り鮮つく江の柳かな
柳ある處に行けば柳かな
又行けば米積てある柳かな
青柳の寝られぬ顔を撫られん
盗まれし馬の來て居る柳かな

五明と改めたるに

初櫻 おつ開きかざす扇ぞ初櫻

矢橋

馬に逢ひ牛に逢ひけり初櫻
きのふまで山なりけるを初櫻
色見ゆる夜明の櫻命なれ
さまざまの名はあらばあれ初櫻
業ひや之を折賣る初櫻
死にたいといふ人は誰初櫻
二夜三夜臚なりしが初櫻
いきたなや朝日さし入る初櫻
蝶鳥よ老が目にさへ初櫻
朝空や人に汚れぬ初櫻
春うとき山木の中に初櫻
日は月にかわるも知らず初櫻
山里や鳶も來て舞ふ初櫻
親のます時は思はず初櫻
畠中や杖に手を置く初櫻
如琴の登らるるに
上泔の天氣になりぬ初櫻

洗足や挨拶なしに初櫻
初櫻木隠れてうらむ風情あり
初櫻淵に峙つ思ひせり
初櫻鍋の鑄かけにつれ立ちぬ
初櫻月も尋ねて宿るかな
五十年見れども花は初櫻

古四王宮にて

怠りを神は咎めず初櫻
家あれば歸る心よ初櫻
初櫻ことしの男齒の黒き
初櫻日は闌れども朝朗
初櫻あの世の人に折られけり
夜のものなき宿とても初櫻
淋しいと思はざりしを初櫻
曉の色は放さず初櫻
初櫻さくら所はさもなく
目に付きて其夜は寝ねず初櫻
幸若と申に逢ひぬ初櫻
手に物の付かずなりけり初櫻
圍爐裡まで日さし入るや初櫻
尋ね來て月も宿るか初櫻
出嫌ひの人ふと出で初櫻
古臭き心洗はん初櫻
連歌師も米搗も立つや初櫻
田家
初櫻あるじは田打男かな
山家
初櫻咎むる犬に何やらん
曙や旅はよき馬初櫻
我が友に目しひたるあり初櫻

櫻

一丈の雪忘れたり初櫻
月出でて氷るが如し初櫻
目に櫻口には鯛の盛りかな

三月 盡

鯛もけふ己が櫻に別れけり

兩日大塚にて

傘提けて櫻に一人二人かな
雨風や若かも盛りの櫻かな
二階にて櫻うこかず手燭かな

前書 略

雲を出て月の見せたる櫻かな
猫も出て櫻に遊ぶ月夜かな
獨り見る櫻に月の早きかな

大塚にて

細雨見れども見えず櫻の撓む夕哉
野社のすけなき櫻咲にけり
安々と盛り夜に入る櫻かな

木入方歌石女立舞

凡て人の心動かす櫻かな
寛とる山を抱へて櫻かな

上野總社庭

くちなはに櫻の道を切られけり
藏なくて里はめでたき櫻かな
夜の明けて見れば雨降る櫻かな
白櫻寒き計りに咲にけり
任せたる身にも日はなき櫻かな
人に曇る櫻處の盛りかな
小奇麗な扶持取町の櫻かな
月を呼ぶ木深き中の櫻かな
狂ひ來て櫻を散らすか雀共

右箱が宗匠説を説し

鳥も舞ひ蝶も舞ふらん家櫻
鳥帽子着て夜の櫻に坐禪せり
あな世話し世間の櫻我が櫻
夜潮來ぬ然も盛りの櫻花
櫻紙心の花も咲返れ
蟻の出る櫻の穴に酒つかん
心よく櫻折らせよ臂枕

ある御方に参り歸るま

或日には膝折つめし櫻かな

川上氏妻三十三の賀に

雲風も障らぬ年の櫻かな
櫻咲く中にも見ゆる烟かな
夜と思ふ心もなくて櫻かな
一林旭をふくむ櫻かな
木の間く人を彩る櫻かな

前書略

櫻のみ花かこゝらの人心
世に活きて櫻見ぬ日あると泣く

花下視をさし付られ

静かなる心を散らす櫻かな

心の若駒にはやされて

頭陀掛けて跡は野となれ山櫻
初に聞く貴様の謠山櫻
兩の手に母と娘や山櫻
明け方の眼蓋冷たし山櫻
寝轉んで寒うなりけり山櫻
墨染や捲り手したる山櫻

大塚にて

誰殿ぞ夜に紛れ來る山櫻

散花

散る中を行けば盛りや山庭
山櫻飯炊き習ふ面白し
風絶えて櫻地に敷く月夜哉

渭舟子の五千句賀

通り箭よ五千第八花車
象潟や花にうつらふ遠籥

又燈臺樓(寶塔寺)といへるによりて

燈老の花の油烟や立つ霞
花に寝て顔へかけるや汗拭ひ
風呂敷に膝を容るや花の山
鎗持の獨り戻るや花の晝
毎日は花も見られぬ浮世かな
山の人數花の雲なり大江山
花盛り雪駄鳴らして歩行きけり
折る枝の筈は花の谷めかも
羨まし暮るれば花にぬる雀

寶塔寺

腰掛けて花を茶受に眺めけり

沙鷗五十の賀に杖を送られしを見

花に曳く藜の杖の似合はしや
花未た下蔭寒し鶴の屎

竹裏亭石燈籠の銘

花の雪東坡か笠に積りけり
花物言はず人物言はぬ夕かな

前書畧

花盛りけふは人のされからべ

寶塔寺にて

本堂の先繪圖出來ぬ花盛り

翁塚前

花も泣け翁の後に翁なし

鎌髭の郷侍も歌へ花に鳥
しつこさや花の男の匂ひもの
夜しめりに動かぬ花の盛りかな
花つく／＼油なき夜のおしまつき

萬固山御雲屋

春にふり花にふりたる御廟かな
遠馬や西日に見ゆる花の中
時鮮や下戸も上戸も花の陰

前書略

盡せぬやふたみの花の磯馴貝
獨りとも思はず花に更にけり
花の中小料理ふやめく路遠し
瀧の音する迄花を見返りぬ
浮く花のすほりて行くや堤口
平して馬知る花の静さよ
掃よせて淋しく見せん花の塵

餘別

墨こめる心は花よ旅印籠
花に身は三つにもならばなれかしな
葩煎つけて這ひまはす子や花の顔

落花盈我衣

眼を明けば花を袂に着ぬる哉
闇を拂ふ花の下居や素蠟燭

當福寺觀音奉納

むれ笠や三十三めくる花の雲
空と入る鶯よいつこは初花ぞ

亡父五十回忌

けふに逢ふ命も花の手向かな
長齊の句に對し

算へては忘る、花の林かな

嵐兒髮髮を祝し

花に浮かれ繪に遊ぶらん居士衣
花にこて馬を借りけり草笠
我等には花も盆子も晴かまし

百坊主讚

若狭井や水は玉なし花をなし

鞍馬山殿と諷ひけるに

櫻はれて行つても見たし花の雲
花の中に居る日は人よ人の顔
臍落す人もあるらん花は雲
花に月明たる口に牡丹餅か

津輕の玉之に

花に遊ぶ身ならば旅は五器一つ
日の落ちてけふなる花と見ゆる哉

横城紀行

散る花

華の落ちたる日

花一片長う落ちたる眞晝哉
鶉の胸に落花を疊む早瀬かな
散る花や手をさし出せばさのみ又
花や散る顔こそはゆき薄月夜
散る花も雲に保つか高原山

吾長妻を悼む

散る花や常ならぬ世と知り乍ら
誰ぞや來ぬ椿の花の落たるは
主るしなげに落積りたる椿哉
赤み出す處折らる、椿かな

辛夷 一つ落ちて二つ散りたる椿かな
山鳩の鳴きつる方や花辛夷
花咲いて高き辛夷の梢かな
吹かぬ日も風の見えけり四手辛夷

山吹 山吹や果の實のなき尼法師
山吹や重けなる花の諸しだれ
山吹は水につくまで咲にけり
山吹や主じを見れば鉢叩

山吹 山吹は折ても行かん此流れ
誰殿へさはかたけ行く山吹ぞ
山吹の花さへ床し茶摘唄
山吹や田螺喰はさぬ處神

海棠 海棠や百鳥が来て起せども
海棠や衰へ易き花の色
連翹に一日雨を眺めけり
連翹を筭にかけたる盛り哉

藤 酒酔を肩にかけたるや松に藤
振袖の杖づく藤の風情かな
藤の棚本木あるき見やる哉
大塚にて

藤棚や遠山載せて暮の雲
夜の明る色や木の間の藤の花
寶塔寺奉納
藤の藤匂ふ鏡や七夜もて
横雲やともに柵引く藤長し

上巳一滴も吸得されば
奈良漬の顔とは見まじ桃の花
叩 鬼庵
草の戸に草の餅なし桃の花

田家にて
すみ酒に田子も節供や桃の花
草の戸に火の餘りあり桃の花
桃のなき家とてもなき盛りかな

畫 詠
桃の花桃より赤し傀儡師
佐保姫の衣やかへし躑躅山
日は斜躑躅喰ふ子等家は何處
白躑躅里神川の水からか

うかれ女の詠
梨の花けははぬ顔の夜明かな
河處やらに貧の相あり梨の花
杏の花 悉く咲いて淋しき杏かな

詩に遊ぶ人
唐梨の花 唐梨の夫さへ大和言葉かな
小 米 缺まるる型をも知らず小米花
卵の花の隣りも近し小米花
星一つ野末に清し若菜畑

人 日
髮結うて賣に出でたる若菜哉
誰か爲に若菜摘むらん小傾城
其の色に目を養ふや若菜飯
若菜賣る聲より匂ふ夜明かな
心當てに蹴て見る雪や初若菜
若菜賣る幼きものを連れにけり
夕飯に残る若菜や辛子和
若菜賣先つ其聲を青かりき
濡れに出でん雨も珍し雪若菜
雪乍ら日にたつ畑の若菜哉
いづこ若菜雪船に引かれて出にけり

類題
五明句集

薺

此の髪も其身其儘薺賣

貧村有孝子

薺堀る親よび立つる日暮かな

八幡田

芹

芹莖や小田の中行く川のへり

世の人の如何に捨つるや芹かしら

叱られて田主に芹を遣りにけり

齊

はやし吹く長屋くの齊かな

悼

佛の座

哀れなり祝儀過たる佛の坐

菜の花

菜の花のとろまごろや瘦畑

菜の花や海少し見ゆる山の肩

夕影や菜の花うつる平堤

菜の花の盛りや碁盤將棋盤

鐵砲の玉に掘らるる董かな

董

對清寺拜翁碑

塚蒸して石に花咲く董かな

前書畧

かしこしや世はかくもこそ董草

松につれて城へ曳かるる董かな

摘めば終ひしほるるものを董草

土菌や田水の中のすみれ草

半刺で切廻したる董かな

董草車の榻に召されけり

江戸の町に賣らぬものかよ董草

月影に摘むは誰待つ董ぞや

董植ゑて嬰兒を庭に狂はせん

火を焼くにか、れば是も董かな

翁碑前

花摘んで董に塚の文字染めん

蒲公英

平原や蒲公英生ふる水の中

蒲公英やかしこにひとつ蝶一つ

蒲公英や蝶となり又花となり

蒲公英や一つ見えたる山のはげ

土筆

ひよろくと生ふや瘦地の土筆

青からで青きものより土筆

地子の出ぬ屋敷と知るか土筆

虎杖を噛みて目をくふ男かな

對酒不覺深

山獨活や蕨盡れば酔に向ふ

干獨活の香に寢覺けり夜の雨

防風堀る濱の下りや朝濕り

なす業のなき日なるかは防風堀る

末黒薄

淺沼に末黒の薄浮きよりぬ

山島のすぐろの薄立延びぬ

風暖く海苔たへたる岩間哉

初海苔の柴にかゝるか薄月夜

海苔

海苔の香や三島泊りの一重産

菊の芽や物憎まねど土龍

菊の芽や札の倒れてうる覺

葉蕨やきのふは人の目のうとき

舟か澤

鶯のきなきや澤の蕨餅
君寝なば狗背の綿敷いてまし

看山京へ上る餞
胡葱も刀も旅の辛味かな

胡葱は柱なりけりぬたなます
胡葱や人の日過ぎの一はづみ

菫にさへうとましき齒の老を泣く
芦の芽や流れ行く水戻る水

芦錐や糸篋見ゆる日の斜
茅花から堀や芽花にかゝる鳥の羽

若菰や風四五寸の水の上
若菰や鴨の引切る音ほのか

春雑 ひし鳴くや胸さし出して春の蛙
永源院にて

山水や雪の下行く春の音
野鳥の春を捜すや雪の隙

嗚呼春も櫻は青くなりけり
春の橋佇む三人四人かな

とろくと寝耳に春の笈かな

夏時 候

兩宮をぬかつき奉るに
常磐木に風の薫りや千代萬

神明社にて
草も木もぬかつく風の薫るかな

山中にて
身を抱く計りに風の薫るかな

眞山にて
峯薫る風や左右に海湖水

かゝる家

世に響く風の薫るや瀧の音
御守の入れせられる程

青嵐 我が庵と思はれぬ風の薫りかな
白馬の青野を驅ける嵐かな

海を照る星さへ青き嵐かな
白雲や山を出て行く青嵐

寢心や鈴音の蛙青嵐
五里來ても嵐に青し田子の森

日の果に帆一つ白し青嵐
藤の香や花の盛りの青嵐

宮川や幣立並らぶ青嵐

慈母十三回忌
明易き 巡り來し日ぞと思へば明易し

短夜や小豆も煮えず鶏の聲
短夜や壁の蝸牛の行處

千之母堂を悼む
月消して短夜いと短きや

夏の夜は寝ぬに起きては豆腐白
夏の夜や都の山の裏表

和清天 折々や鶯の羽ひねる和晴天
暫くは立て動かす夏の雲

夏の山 火の影は寺か硯か夏の山
夏の山つむり剃る音さやかなり

亡父の墓に詣て
石の香や我が呼吸のみ夏の山

即題
院々の雨にうづむや夏の山

夏の海 橋七つ見れども見たし夏の海
夏川や日脚さしこむ蟹の穴

夏川

夏川や小石まばらの星の影
箱岡にて

夏野
むすべとや夏野の井戸の捨柄杓
雲影に暫し息つく夏野かな
馬のはむ齒音も高き夏野かな
白馬の青野を駆ける嵐かな
下露や夏野分け行く脛かゆし
鈴馬の遠曇りする夏野かな
夏沼や蛇行くあとの消もせず
物一つ思ふ事なき四月かな
海山に帆一つ白き四月かな
風青く四月の河藻底や吹く
鶯の腹見せて飛ぶ四月かな
わらうた送りけるに

卯月
試に一食したる四月かな

卯月
よき扇かざして通る卯月かな

五月
卯月野に撞鐘運ぶ響かな

五月
馬市や五月の頃の雑煮の香

五月
早月空合はぬ眼鏡の心地せり

五月
寝鮒捕る数の火振や五月晴

五月
塚原山に登りて

五月
海に入つて目に限りなし五月川

五月
梅雨
長降の身も酸うなるや梅の雨

五月
大坂みたと橋

五月
五月雨や烟のぬけぬ船の風呂

五月
五月雨や明けても同じ小間障子

五月
振れど出ぬ香煎筒や五月雨

五月
五月雨に心動きぬ古壘

五月
五月雨や鼠巢くふ晒白

赤錆の鐵橋寒し五月雨

白鳥の飛んで明るし五月雨

五月雨の雲濃き方や富士の山

髪結の手の冷たさよ五月雨

旅人の欠伸も長し五月雨

毛を換ふる鷹寒げなり五月雨

海山や空押かゝる早月雨

五月雨の障子を廻る蚊蜻蜒

五月雨に赤錆臭し藁庇

五月雨の雲も朽なば朽ちぬべし

五月雨や葎は白き壁の内

五月雨や世に隠れても月は西

しらはせて生鮒寒し五月雨

五月雨や海のものには赤錆賣

岩野に小夜庵を結ぶ

蓑虫も葉蔭頼むや五月雨

五月雨や根なしかつら壁のあや

五月雨や醬油絞木の石の汗

海山の聲絶にけり五月雨

五月雨や里も鳥も雲の中

五月雨や山見ゆる日を時鳥

五月雨や豆の生いたる流し元

五月雨やいつこをさして夕鳥

貧交行

五月雨や團扇にのせて茶をあふる

五月雨の目に見ゆる雲なかりけり

五月雨や庵の柱に錢二百

水抱孤村遠

五月雨や心を絞ぼる夕つのもり

五月雨に馬のあくびの移りけり
五月雨や物にうつらふ繭の臭

忠臣藏書五段目

火繩さへ消ゆる計りや五月雨

五月雨海山の音ふり埋む

五月雨や性根のぬけし丸合羽

長木澤大露摺物に

青臭き雨や阜月の雨合羽

ちら／＼と青田涼しや七つ過

吹く程もあらで風見ゆ青田づら

重厚、宗譜、瓜坊送別文畧

目に止めよ青田／＼の瀉の敷

水澄むや植田の蛙夕鳴す

六月や磯に陰ある松の風

六月や先づ寺がよしされ繪よし

前書畧

六月や小判の上に寝て見たし

六月や裕着る雨あな嬉し

六月や三日月代五日爪

六月や水晶を握る筆の隙

六月や枕てふものあればこそ

六月に咲ても木槿夕なる

水無月の水海の脛我や泣く

水無月や鯉待つ間の一ねふり

水無月の嬉しきものやよき硯

丸帯の結ぶも安すし夏の月

夏の月遊びわざなり自身番

夏の月松に音して出にけり

夏の月夜は寝時分の事ならん

我が影を鏡に見るや夏の月

髪切りし海とは見えす夏の月

晝讀

暑

一休の裸話しや夏の月

土器の日向に割れて暑かな

松脂のなだれて暑し枝の折

蟬の羽も肩にかからぬ暑かな

雨勝や虎杖たけて軒暑く

草暑し醫者なき里の水あたり

脱かけて暑し片暑の竹の皮

焦げ落ちて光るも暑し竹の皮

身にあぶら胸毛に絞る暑かな

暑き日や腕で顔拭く田草取

足早に穢多町通る暑かな

何もなし暑さかけらふ砂の中

題馬

取り附いて野髪に暑き施かな

笠や茫茫草に路見ぬ暑かな

家こぼつ人顔暑し煤の中

柱さへなかれと思ふ暑かな

忠臣藏書九段目

歌口に息をつめたる暑かな

泉宜祥庵に遊ぶ

涼しさを杉間もれくる川の音

涼しさを人なき方の水馬

新川觀流亭

涼しさに馬駆けさする素浪かな

川浪のもつれて涼し夕嵐

涼しさを洗ひ脛に紫蘇二た葉

三市樓

涼しさの川に影見る坐敷かな

山 村

涼しさの漏るるや笥の朽目より

ある御方にて

涼風の星を見せけり木々の闇

涼しさや蜘蛛の捉りたる軒の月

木隠れて葉に聞く雨の涼しさよ

傘 岩

傘の巖影落ちて川涼し

ひか／＼と浅井の底の砂涼し

北海坊を迎へて

松一木外に涼しき陰もなし

夕風に一筋涼し舟の道

観海樓之記文略

欄干や風を枕に夢涼し

夕涼や罌罌する馬の目のしごろ

川筋や火天の過ぎたる夕涼し

禪林にて

木々凡へて枝垂れ苔の露涼し

泉州佐野に住まん人に(右稻)

涼しからん吹井に近き住み所

夕涼や鮓そよぎ行く水のあや

悼 吳 來 妻

誰か問ふ涼しき夕あつき晝

芭蕉翁畫讚

涼しさや生涯は只杖と笠

五 社 堂

怪しくも涼し甘尋の杉嵐

孔 雀 窟

唐鳥の窟に浪の玉涼し

御幣 海 苔

とこなしの酔浸し涼し貝ながら

住吉の池

樹々の影動きて池の波涼し

夜放れの涼しき山の形かな

夕すゞや川打越して山の影

涼しさや川呑む馬の尾のなぐれ

涼しさや水にからまる水の音

月涼し角に露持つ蝸牛

椅子かりて涼しさ聞かん川の音

前 書 畧

涼しさに死ぬ稽古せん一と枕

帶 泉 樓

涼しさは庭に鮎見る流かな

馬涼し八里を飛んで尿せず

青野川鷺影流す夕涼し

川瘦せて水は骨行く音涼し

御風坊來秋

涼しさを知れや木蔭の薙切

舊 宮 人

涼しさを見にか住よし玉津島

松 庵 避暑

涼しさの餘る笥や瓶の音

會津伊弉須美神社奉納

泥涼し神の植田の柳うち

涼しさは硯一つの遊びかな

雪籠る濡砂涼し濱鹿

涼しさや鳥をまねん水なぶり

雲雀鷹拳に並らぶ涼しさよ

居を市中に卜して

水瓶や窈かにさして月涼し

晋子隅川の匂を思ひ
立ならぶ夕岸涼し都鳥

紙秋子より梅干を贈られ

酸きものは口に涼しき目に涼し
流れたる月に音ある泉かな

溪橋散步

簫吹いていつみの聲を結ばざや

高野にて

毒を消す印もむすべ苔清水
捨て、ある柄杓も青し苔清水

人かげや清水に沈むさ、れ蟹

山頭父祖の墓にて

落の葉に汲んで運ぶや苔清水

高野水

濁しては澄むを見て居る清水哉

立寄れば烏ねぢよる清水哉

立歸り入齒尋ぬる清水かな

清水まで鯉魚を見に行かん

都に志す野了に

國々の清水に口をす、がれよ

砂に面出して茗荷の日焼かな

夕立や此頃聞かぬ慕の聲

夕立や寺から餘まる御大名

虫干に此の器を取出で

夕立の山を尋ねん遠眼鏡

鳴り立て餘所へ行きたる夕立哉

夕立や庭を流るる竹の下駄

夕立や留木押切る早瀬川

夕立や雨の中なる松の聲

夕立のあとに光るや鶴の聲

雲の降

閑闌桶の輪も動くなり雲の峯

六月四回祿後

木も草もなくてや高し雲の峯

炎天

草取の田中に立てり雲の峯

草の葉に夜は隠れて雲の峯

いづこより立つや吉野の雲の峯

雨乞の烟も届け雲の峯

雷の來てからまるや雲の峯

氷室ある山にも立つや雲の峯

雲の峯さればよ熊野八庄司

雲の峯静かや松の長林

炭販男に勸められ

牛かりて行かん氷室の櫻まで

白かねの鉢も杓子も氷室かな

涼しき寺に行き

夕風に氷室の櫻夢に見し

人事

秋江新宅

風青き新しき家の簾かな

磯馴松畫譜

夏かけや須磨は青簾にそなれ味噌

隠す事なき宿ながら青簾

京にて

大佛の柱ぬけたり更衣

京都に遊ぶ

極樂の更衣見ん京の西

衣更けふは晝寢を忘れけり

物足らぬ袂の底や衣更

若白髪となんいへれども一筋に驚きて
茶小紋も偕は似合ふか更衣

友達に戯る

見違へるけふの貴様や更衣
更衣東坡か扇さええてけり
きたなしと人の云へばや更衣
茶の湯者の急度めきたり更衣
疊こそ更へて欲しけれ衣更
衣更いと、や老の前下り
衣更よき分、別も出ぬべし
新しき茶の香もきくや衣更
衣更人がましとや人の見ん
御守の御通行を拜み奉りて
衣更香籠持も見られけり

火宅

虱去れば蚤は来るなり更衣
足の向くに任せて出でぬ更衣

其龍に對し

ゆるされる浴衣重ねの更衣
衣更罷出たるけしきかな
我老ぬ世間を見れば更衣

横城の人々に對し

更衣爰等の人は慥かなる
膝頭己れ知れるや更衣
兎に角に京の事なり更衣

來翁客院誠を祝ふ

綿抜きて健かならん心まで
綿抜きて肩に掛れば物淋し
葉になりて吉野は寒き裕かな
裕着て二日三日は軽きかな

綿 抜
裕

裕着せん阿房よ髪をあげて結へ

野松素大に松島をすゝめ

頃形に疊むもをかし旅裕
物申に出向ふたれば裕かな
裕着て世人がましき朔日や

賀益戸瓶隠氏病癒登城

單羽織 ふつくりと單羽織や肩の形
少年行

帷子 振袖の單羽織やさりくす
帷子やゐしきにつらき足脂

帷子に撫子打たん夕河原
繕はぬ身も帷子の寝起かな

夕影や芝居役者の蟬衣
浴衣着て町中歩行く涼しよ

維鹿へ出發

香薫散 盃に香雲を甜る旅出かな
大黒の繪ある扇とり出で

何ぞと望み侍りけるに

扇 仰けく福は扇のうちにあり
向ふ日に顔忍ばせる扇かな
小縷にて結ぶ扇の命かな
蝙蝠の窟

扇かけん岩の額の青かつら

竹風攪睡

手より扇落ちて目さむる竹青し
開くとも風に香はなし古扇
日々に替へたきものは扇かな
扇こそ遂ひした事の書き易き
遊びく兄弟つれや團扇賣
白くして置かぬ團扇や手習子

團 扇

老ぬれば骨も鳴るなり遊 團扇
留守の戸に誰か物書きし團扇哉
蠅共に替るや團扇の餘り糊
夏頭巾 夕川や 蛭おこす 夏頭巾

蚊帳 澄む月や蚊帳を徹して竹の影
寝姿や鬼のこもれる 蠅の内
前書 略
女人大魔王所一切人

紙帳 今年もや捨かねる身の蠅を吊る
蚊帳に一つ此の河風を欲しいかな
借蚊帳の短き足にふし佗びぬ
先づ以て心休みか 廣い蚊帳
苧藻に里の夜泊り蚊帳もなし
ふはふはと 寢息の見ゆる紙帳かな
吾長の紙帳を製するに

蚊遣 餘りあらば 菖蒲の糊に紙帳せん
草の戸や客に構はず紙帳打つ
あの中へ今宵泊る か夕蚊遣
蚊遣火に粽の殻の行衛かな
暮れぬから山里くらき蚊遣かな
桐の木にたまりて仕廻ふ蚊遣哉
蚊遣燃えて在京の君や顔隠す
蓬分けて五日の露にふれにけり
抜けば 箔散るは 菖蒲の刀かな
刈人の禪に結ぶあやめかな
屋根石を序に直す 菖蒲かな
吹抜の鯉も 泳ぐや 菖蒲草

菖蒲 女水亭にて
昔かすとも 菖蒲の匂ふ軒端哉

蓬 馬方の頭しらに結ぶ 菖蒲かな
菖蒲打つ蓬の門は免せかし
鎬立つ露や五尺のあやめ 艸
昔く程は 菖蒲持ちけり 井の邊り
昔く 菖蒲根も 盡きぬべき 軒端哉
一と把の 菖蒲は 鯛になりにけり
我が丈に合ふを引かば ばあやめ 草
あやめ刈る 細江の千鳥子に鳴くか
鎌音のさやかに聞ゆ 菖蒲草
菖蒲刈るあとの 淋しき 漬木哉
昔くにこそ宿は蓬のおのづから
春潮初 幟

幟 家持の數に見えたる 幟かな
盲子の顔に 風聞く 幟かな
芝引樓の幟を祝ふ
松もそよぐ千尋のかげの 幟かな
雲寒し五月過ぎたる 幟竿
橋の袖なつかしや 印地打
町人の飾り過ぎたる 兜かな
思ふ人の見えてや 落ちぬ 競べ馬
さ、かにの 笹に引る、 粽かな
眼のしむた娘かしこき 粽かな
毛の生いた 粽ほしいか 鳴く鳥
祝部子が 粽するかよ 三すす 川

藥玉 木の杖に 藥玉かけん 夕葉風
藥玉を 鈴に下げけり 帯の端
筑摩祭 眞似をして 割ける 鍋や神の罰
灌佛 灌佛の形は 卍の 始めかな
前書 略

魚鳥に祝はんものを佛生會
灌佛や光りさしあふ青葉影
灌佛や木の間をもるる暎
嘉定喰 汗拭持たぬ人かよ嘉定喰

田植 兼平の塚で飯食ふ田植かな
休む時歌ひもやらす田植かな
畦路

早乙女 書てやる我が名汚すな田植笠
早乙女や人目に見ゆる腹乍ら
朝風や早乙女笠に戦きゆく
休む間の夜さへ短し植乙女
早乙女の笠のうつきや植拍子

送扇 早乙女に泥な濡られそ道すがら
早乙女よ生れかへれば妻にせん
田草取 田草取息つく顔は雉子なり
早苗取 藁一把腰に帯して早苗取
早苗船 犬二つ添うて行くなり早苗船
照射 照射する小田の手隙や若い者
規ひする火かけや百合の一つ花
涼しいと岡でこそ見れ鶉の簞
逆まに手繰らるる鶉のうきめ哉
年云はぬ鶉飼の翁身を耻れ
晝凄き鶉飼が宿の躰かな
一度びは遣うて見しを鶉の簞
鶉に出ねば妻を遣ふや小夏酒
鬮を焦す身の果如何に鶉の簞
髪かしらある鶉遣ひが焚ほこり

前書 鶉飼 涼しいと岡でこそ見れ鶉の簞
逆まに手繰らるる鶉のうきめ哉
年云はぬ鶉飼の翁身を耻れ
晝凄き鶉飼が宿の躰かな
一度びは遣うて見しを鶉の簞
鶉に出ねば妻を遣ふや小夏酒
鬮を焦す身の果如何に鶉の簞
髪かしらある鶉遣ひが焚ほこり

夜振 鶉遣ひの妻は蚊に寝ぬ破戸かな
寝鮎とる数の火振や五月闇
川狩 川狩や客に焚かせる鍋の下
戈すれども宿鳥を射すと

泣流し 胸は汗物も言はれぬいたみ哉
悼瓜 六弟
汗 骨髓の汗は拳を滴るや
竹伐るや見る人をさへ汗拭

安居 野松の子を弔ふ
悔みいふ言はなくて汗拭
つくばうて安居の噫貫ひけり
飯焚の茶の間に居る安居かな
下駄履いて川中歩行く涼み哉
能登殿の眞似もして見る涼み哉

納涼 帷子を流して騒ぐ涼み哉
いづみ
松星 顯る
物知りに星の名を問ふ涼み哉
牽き入れて馬と涼むや川の中
階や御城ならずは夕涼み
槻の木に股に棚かく涼みかな
川端や小石打越し夕涼み

浪による月を拾はん磯涼み
宮寺の屋根を算へて涼みかな
持て出で脚榻に跨ぐ涼みかな
裸身に羽織を着たる涼かな

楮むく人と咄して涼みかな
夕浪に千鳥慰む涼みかな
若き人に簾下たる涼みかな

竹榻話舊
鶴も来て涼むなりけり岡の松

酒香滿坐匝醉
座頭達膝折つめて涼み哉
は、き、の末摘庵の涼み哉

涼めとて人の呉れけり古泥障
門締める寺惜まる、涼み哉
川涼みけふの相撲の評判か

井を浚ふ底から清し水の音
浚井の水に鯉を浴しけり
僧珠阿へ

草の戸は只さらし井の水一つ
一夜鮮
うたかたの粟鮮なる、一夜かな
爲添酒客興

瘦骨の肌をしぬくや鮮の石
沖 膾
月を兄九十九松や沖膾
江村晩歸

夕月に歸り惜みや沖膾
題 美 娟
冷 麥
冷麥やあるじ宮仕を撰まれし
八泉より稻庭(飯飽)を送られ

冷麥にびいごろの皿あらまぼし
菊地元俊をいたむ
葛 水
葛水に淋しき匙の光りかな
心 太
六月も唇寒し心太

夏坐敷
よい處に鳥海ありて夏坐敷
夏坐敷尤さうな硯かな
香ふりて竹に風聞かん簾
簾目さめて見たれば誰も居らず

籠 枕
吹ぬけて思ふ事なし籠枕
土用干
馬は野に遊びに出るや虫拂
老たる母の文箱より取出給ひけるに

臍の尾の年號古し土用干
祖先の開きし播州住吉村徳行寺にて
銀杏葉に昔し匂ふや土用干
五老か句意を味ひ

虫干に辨慶が書いた手形見よ
新 居
引結ぶ蚊帳の釣手や土用干
取出して煩はしきよ虫拂

植 植
植ゑて行く芋の二葉や雨の粒
誰か爲に女麻刈る月夜哉
麻竈の烟流る、小川かな

麻を刈る女哀れや左り鎌
麻刈の夕かけ歸る夢路かな
午頭王社
舟人よ其の青茅折れ稜せん

前 書 畧
鹽鴨やけふは名残の夏稜ひ
菅貫やいとけなき子の又といふ
矢橋山王宮獻額奉納

菅貫やぬけた處は月の形
動 物
老 鶯
人の老鶯物を言はぬぞよ

時鳥 礫にも聲はありけり時鳥

大塚にて

燈臺の下も闇あり時鳥

晉州子京のぼりに

巢を立て二十日計りぞ時鳥
起きて待つ果報は何ぞ時鳥

籠を通りけるに

耳なしの山は名のみぞ時鳥

時鳥提灯燃えて仕舞ひけり

手に合はぬ戸は明にけり時鳥

振り向けば永觀堂や時鳥

召し仕へる女の伊勢大和路かけて
旅立を申され

雨に着る寢吳座忘るな時鳥

日暮から夜半けしきや時鳥

蚊も一つ鳴いて來る夜や時鳥

既に入る月の矢先や時鳥

待宵や梅花心易時鳥

走り出る耳に目鏡や時鳥

浮かれ出る身は鮫鱈や時鳥

關屋の晝に

夜明まで寢物語や時鳥

捨子を憐れみ

落かへり捨子に鳴くや時鳥

曙や今迄何處を時鳥

人々鳴かぬといふに

不斷鳴く物なら烏時鳥

時鳥雲より聲や時鳥

我が宿に足はぬものや時鳥

時鳥聲もれとてか緞子障子

中野村にて

時鳥羽黒の杉の曇りかな

一聲山鳥噪雲外

雲を蹴て月を吐たり時鳥

落柿舍句法

坊守よ米ごき止めよ時鳥

雪中庵風格

時鳥鳴くや焼場の火のあかり

晋子が活風

時鳥比丘尼處の夜更かな

聲飛て川に影なし時鳥

又の夜は鶏鳴さぬ時鳥

時鳥雷遠くなる夜かな

時鳥鳴く夜聲なし土手の松

行脚の僧に

木につきて居らぬ生れや時鳥

表母

一と息や西に飛かけ時鳥

時鳥貧乏耳を慰めよ

雲を凌ぎ一聲落せ時鳥

聞かて寢ず聞て寢られず時鳥

松山や虹の中より時鳥

鶯々舎に

翌かへる人爰にあり時鳥

めくり來る月に聲あれ時鳥

今一つ肴に鳴けや時鳥

高響するや並木の時鳥

棚藤を川と見てかよ時鳥

九皇君に

君ますぞ時鳥鳴け此あたり

七倉七景の中

時鳥聲も七代の初ならば
時鳥舟を忘れてつと立ちぬ
岩つかむ杉夜嵐や時鳥

悼

時鳥思へば月のなき日なり
青き山淺黄の山や時鳥
鼠こそ油はねふれ時鳥
日の岡や牛も見えぬ夜時鳥
時鳥眼のなき人を夜の友

身生山七回奉納

杉の香や雲より上の時鳥
頃日や二言めには時鳥
鹽斷の君は聞くらん時鳥
山苜の花こぼるゝぞ時鳥
時鳥顔へかゝらぬ雨夜かな

方違ひせし五右に逢ふ

手を打つやまくれあたりの時鳥
頃日や月夜も稀の時鳥
母負うて札打もあり時鳥

師夢送別

もひと夜も木に止らぬか時鳥
若鳥は口もほこれず時鳥

三人が聞き四人が聞かず

聞直せば争ひ止まん時鳥

梅有追悼

時鳥西へ飛びしと申かよ

山形竊隠子追悼

時鳥聲なきは魂か俳か

横城之記文畧

水長く山は目で睡む時鳥

業人追悼

音を入れて鶯悲し時鳥
朔日に聞た人こそ時鳥
麥に寝ぬ人こそはあれ時鳥

風氣半月

駕借りて一夜出て見ん時鳥
夜歩行は八幡殿か時鳥
あやめ茸く棹さす舟や時鳥
時鳥鳴かねは闇の闇夜かな
聞かぬより聞けば聞たし時鳥
聲水に振らば犀角時鳥

寺内奉納

籠居初時鳥龜甲山

右稻都難波大和江都陸奥より

歸りしと文あり

閑古鳥

木兔に鳴いて聞せや時鳥
閑古鳥鳴くや伽藍の石計り
閑古鳥鳴くや火入の灰に穴
閑古鳥鳴くや柱に身を任せ
松かさを落して行くや閑古鳥
來る人は鳴くといふなり閑古鳥
閑古鳥姿見ゆれば猶淋し
物を喰むやうすも見えず閑古鳥
胸に物なき日の友や閑古鳥
常なれば鳴くと思はず閑古鳥
聞人のありとて立つか閑古鳥
獨り鳴いて獨り暮るゝや閑古鳥
鳥さへ居らぬ里かな閑古鳥

聞給へ笑うて遣らん閑古鳥

横手留別

我が乞ふる聲あどにあり閑古鳥

流行風に人多く死す

人の死ぬ世間は厭やよ閑古鳥

誰か居て障子張りしぞ閑古鳥

今朝喰ふた椀かきのふは閑古鳥

閑古鳥寝るか行くか人の云ふ

山苜の香にかる軒や閑古鳥

草の戸をおびやかしけり行々子

行々子耳を寄せねば静かなり

京の地を離れて聞くや行々子

前書略

性空の耳には何と行々子

小仲江山老人を悼み

叩ても明けぬ戸に鳴く水鶏かな

返事せば暫し止めたる水鶏かな

帯しめて聞直したる水鶏哉

水鶏鳴くや真菰を渡る風の中

二夜来て夫と知りける水鶏かな

水々し水鶏鳴く夜の空

草の戸をあなつりよるか鳴く水鶏

雨そよく眞菅の中や水鶏鳴く

川鳥や草を需めて水鶏鳴く

逐ひ上げて枝にしほく羽抜鳥

背負はれて浮巢見に行く脛痒し

練雲雀 草の中もいきれやすらん練雲雀

鹿の子 草山や子に顯はれて鹿の鳴く

夏鹿 夏鹿や顔さしのべる川原風

猫の子 猫の子の所も知らず狂ひけり

洛の重厚、江戸の宗譜、明石の瓜坊來訪

夏の雁

鴝の舌

夏千鳥

初鰹

毛虫

蚤

技蛙

蝸牛

忍びやかに見えて床しや夏の雁

鴝の舌 菖蒲の水にす、かばや

草の戸はさらでもすめり鴝の舌

夏千鳥 早瀬に聲も瘦たりな

江戸に知る人の未だ對顔を得ざるに

見ぬ戀や先づ都鳥初鰹

江戸に上る某の子息に

富士上野 團十郎や初鰹

喰うたとは云はぬ人あり初鰹

喰はぬ顔する事よけれ初鰹

白壁や毛虫 這ひ行くののろみ

戀しき時にぬば玉の夜の衣を返せば其人を夢みんもさせる事なく

蚤にこそ返しては着れ夏衣

蚤ふせぐ菖蒲の薙作らばや

洛の風狀紙隔の兩宗へ

登りてはいよいよ青し枝蛙

山城様入らせ給ひ當坐を召させられ

飛ひおりて聲さへ出でず土鴨

大 棧 橋

岩橋や榮螺に馴る、蝸牛

いつまでか家捨て兼ねて蝸牛

蝸牛竹をたはめて涼しいか

我に向て何用あるそ蝸牛

家を出ていづくへ行くぞ蝸牛
静なる日の友にせん蝸牛

蝸 蝸 了閑少閑
搗鐘を捲いて恐ろし蝸蝸

何なりと壁に物書け蝸蝸

蝸 田鶴樹行脚に晝の螢を望まれて

晝は又草と化したる螢かな
寝時分に町中へ来る螢かな
つくねんとして居れば来る螢哉
三井寺の門から戻る螢かな
百姓の欲しかる水に螢かな

山 家
山風や螢更け行く垣根川

風に落ちて馬糞に光る螢かな
岸の竹露も雫も螢かな

野 外 曉 天
曉の野井に落る螢かな
水草や影に別れて飛ぶ螢
手うちて螢招かん木草かな
岸草の螢こぼる、四つ手かな
螢火やほろつく雨に囁り飛ぶ

其角が螢の匂を離したる人に
酒飲まぬ目には光らぬ螢かな
去來が風

光り出す螢や杉の下くらみ
丈草が風

木の下の螢渡はん水はちる

許六が風
螢先づけしきや唐の團扇持
木導が風

折鶴に入る、螢や尻の穴
正秀が風

幼な子や螢に潜る馬の股
凡兆が風

藪際や大粒雨に飛ぶ螢
惟然が風

木の樞や足も濡さず螢狩
野坡が風

傘へ入れて見て行く螢かな
北枝が風

籠の螢二寸の麥を命かな
一笑が風

釣竿にかたけて歸る螢かな
桃隣が風

扇の詩に螢這はせて讀みにけり
杉風が風

螢火も眠たくなるや夜半過
支考が風

螢火をこゝらかしたるつむじ哉
嵐雪が風

袖にためて妹許り行かん螢かな
其角が風

加茂川の水に露打つ螢かな
江田さして潮に亂る、螢かな

帯泉樓
とぶ螢夜に入る琴の塵かとも
螢火の露々這ふや竹の艶

螢飛で扇を握る栖かな
螢火は葎の露を油かな
草川や螢亂る、鹿の跡

柳色依人欲登樓

螢飛て人も柳も戦さけり
青竹や螢飛ぶころ子も一荷
川崎や螢こぼれて小夜千鳥
螢飛で蚊屋も露けき夜なりけり
螢火や橋へ上れば橋の下
小風ふく川は緘に飛ぶ螢
柳する舟にこほる、螢かな
來ぬ筈よ齒のなき口に呼ぶ螢
清く清きみたらせ川の螢かな
つるめそが子に遣はる、螢かな
いさかひの水もすみたる螢かな
螢火や寺の小杉の竹もがり
築をもる背中痒がる螢かな
戸をさ、で寝たし螢火川の音
風來れば螢も來ぬる小竹かな
篤と闇凝り螢の水近み
螢三つ夫よ山姫か袋草
螢飛ぶ淺瀬印の葉竹かな
螢見て蚊帳へ這入れば寢安し
手から手へ移せば瘦る螢かな
螢火や嵯峨の川風竹に聞く
夏虫や拂ひもあへず尾なし馬
蜘蛛の子の身程に家を作りけり
野堤を風に渡るや蛇の衣
羽 けふは何の日なるぞ蟻のひたと飛ぶ

肥前より來りし連阿に對し

水馬

何處へ飛ぶ思案を蟻の羽繕ひ
かきめくる身の狂はしや水馬

訪 隱 士

住かねてすまざるらん水馬

題 風 原

水馬遂に其の身や魚の食
行水をそしらぬ顔や水馬
粧ひの先つ涼しさよ水馬
暇まなき身の拙しや字書虫
村口や蝙蝠交じり夕燕
蝙蝠や人待顔の人を摺る
木の節のあれが夫かよ蟬の聲
涼しくも暑くも鳴くや蟬の聲

襖に樟の太木を沙鷗が
書かれたるに

蟬も來て止れよ宿の涼しきに
浦松や日のある丈けを蟬の聲
何の木にふれてかびけん蟬の腹
けた、まし木を離れ行く蟬の聲
訪月遁留守なりければ
いつくへか鳴くに出てけん蟬の衣

宿 如 是 閑

木々高し蟬の音夢に入る宿り
一ど筋に鳴くにもあらず蟬の聲
這ひ出づる蟬の青羽の寒む氣なり

九皇君入らせらる

空蟬の衣あらためて這出ぬ
親の目も蟬螿す蜂は打もしつ

忠臣蔵畫譜十段目

蟬鳴くやみかき切たる堺錠

槻の木や夕日に蟬の横歩行
其形ちのこす歎きや蟬衣
初蟬や目鏡掛れば飛で行く

丈左へ申遣す

加茂の蟬梢に水を散らすかよ
飛盡きて落るや蟬の亂れ聲
青蟬よ飛ぶまで忍べ葱草

宜群寺

蠅もなく蚊もなく蟬の聲は雨
蚊の聲を手繰り上るや釣瓶繩
耳に蚊の入相告ぐる山路かな

脇本

海を見て寝轉ぶ上に蚊なき宿
蚊の尻の茶莢になりたる憎き哉
とり廻はす蚊の聲凄し間半釣
駕の緞子蚊一つ狂ふ眺め哉
人待て加茂川渡る晝蚊かな
蚊屋の蚊の朝日に迷ふ哀れなる
線香につくや蚊一つ又一つ
蚊の吸ふを月に見て居る腕かな
師が爲に手向する夜は蚊も打たし

窓下

糊に立つさばへかしまし几
狂ひ落ちて火に入る蠅の烟かな
淺ましや夢に身を噛む犬の蠅

草庵

獨り居もうきは放れず飯の蠅
藤の花塚鳴泉流る
蠅一つなくて静けし水の音
水引や蠅も拂はず畔枕

老泉亭

蠅一つなくて静けき住居哉

前書略

子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

月照平沙夏夜半

小鱗引く白濱長き月夜哉
手拭の流れて鮎の散る瀬かな
岩藤や岩魚を掴む花のかげ

前書略

夏生鼠 夏生鼠生きて居るかといはれけり

植 物

若 葉

風の來て愛する如く若葉がな
寺埋れて若葉に高し鳥の聲

月道庵

芝焼の豆腐ねたれん若葉哉
轉た寝の臉を徹ふす若葉かな
脇息によれば若葉の匂ひ哉
寢に來ぬか若葉に雨の降りかゝる

甲之軒

風聞いてぬる宿安し山若葉
輪藏に蝶眠むり居る若葉かな
梅杏若葉少からぬ程戦ぎ

萬固山

若葉漏る日の静さよ鬱多羅僧
吹通す風に花ある若葉かな
屋根越して白帆の見ゆる若葉哉

東箱の眠前

花残る若葉の雨の静さよ
又一人若葉の花やかくれ垣
見るものよ風の若葉の九十九折

新樹

絹を裂く音や新樹の雨の脚
人聲や新樹にこもる宮普請

若楓

川音に心さらさん新樹蔭
日の透て井の水涼し若楓

薄やうに物書く窓や若楓
若楓音ある水の岩根かな

若楓 飛石 残す流かな

夏木立

鳥の糞ン地に音高し夏木立
祐巴 追悼

消てさへ月は目にあり夏木立
酒旗見えて烟ふくめり夏木立

虹の立七つ眼鏡や夏木立
梅山 天神

氣高くも匂ひぬるかな夏木立
寶鏡院再興

寶鏡院再興

番匠は晝寝忍ぶか夏木立
風匂ふ夏の木立や笠やどり

木子に名つく

巢の鶴や木の實そこねす夏木立
夏木立かゝる牛にも槁かな

萬固山

下關

僧の縁ありて寝ねけり夏木立
下關や聲をしるべに親鳥

全良寺

闇作る木下静けし白躑躅
下關の下に明るし賣子木の花

醫師の人々に對して

我知らぬ草々問はん茂かな

古杉寺内奉納

茂るかな北を守りの神林

人丸宮奉納

若竹

茂り茂る神の縁しや柿林
若竹やびるごろの中に苞一つ

ことし葉の竹に月ある夕嵐
去年今年別れて涼し竹の雨

若竹のとても丸屋の戸もなかれ
若竹や音は早瀬の山おろし

其章亭

竹のみか古きは人の眼に付かず
悉く今年になりぬ竹の露

戸村義國公十八歳甲冑の像

肉ありて堅し眞竹の反るかたち
竹を見れば大方若しされば我

筍に葉の出て人の見捨てけり
筍にあなつられけり瘦腕

竹の子のとつ先涼し露三粒
子の出来てかたう見えけり竹の形

川を見て竹の子鮮に遊びけり
竹の子に訪はるゝ庭や口惜しき

竹の子に三とせ見ぬ人待れけり
竹の子や三日見ねば竹となり

身觀

竹皮落 幾つ着ても果は單ぞ竹の衣

卵の花 卵の花に影こそ黒し飛胡蝶

卵の花に門ある家や六太夫
卵の花に齒を染めし僧立居たり

卵の花に日の入りあや、ひく燕

卯の花に憂き雨待よ芋の苗

俳諧を問はれ

目を閉て開けば青し花卯木

桐の花遊行の閑居訪はん哉

木隠れや花橘の女繪師

橘の花に引かれん後ろ髪

紫陽花や盛りに負けし花の形

紫陽花や何し化ても果は皆

紫陽花や走しり流る、井の垣根

小町歌

紫陽花や七度び目には茶色なり

紫陽花や木隠れて水のよき舎り

紫陽花や大きく咲て上を見ず

紫陽花や小水流る、小城下

合歡の花風は夜に入る時少し

何事も忘れて涼し合歡の花

夜川する里の合歡の木眠たいか

我が眉も合歡の花とはなり行くか

風を待つ軒の相手や梧桐

百日紅心に秋のうつるなり

しほ高うなるや常山の葉の暑さ

天蓼の花や山路の朝平

行き暮れて天蓼の花手折りけり

八つ橋の畫

花や羽子橋や羽子板燕子花

田の水の寺へ曲るや燕子花

誰か来て水の濁りや燕子花

水一荷あげる二階や燕子花

瓶隠子より燕子花を惠まれ

乙咲の花小式部のかほよ哉

青樓曲

隠れぬや花は隠れぬ燕子花

吹分れ真菰の中の燕子花

燕子花座敷に水を打せけり

見えつ見えすあるこそ花よ燕子花

其の色の傘さす頃や燕子花

二つ目の花哀なり燕子花

炎燒後

燕子花いつ大佛の顔を見る

象潟やあるにあるらん燕子花

馬入れて入江めぐらん燕子花

此の里や廻れば一里花且見

中隠門人和融せしと聞き

花あやめ

開けては香もめてたし花あやめ

麥時や何處ともなしに薄烟

麥時や鹽鳥賊賣の聲はづむ

撫子や露に起立つ朝の内

撫子やとらへて見れば折れもせず

水あこや撫子起きも得せず咲く

獨り住む人を訪ふ

芥子の花

白芥子や世に預からぬ花の暮

一合の芥子や見渡す花盛

色芥子や白芥子や世は心々

芥子の花物の見事に散りにけり

短夜の明けたる芥子の命かな

咲き澄て目にしむ芥子の白さ哉

榮敬母公二十三回忌

頓て行かん命を芥子の手向哉

茨の花叢ならぬ匂ひかな

南天の花のみの華の栖かな

梅 實 櫻杏わからの雨の青さかな

青梅の丸くなる時猶青し

熟梅の匂ひ涼しや色涼し

櫻 實 實をはみに頓て又來よ櫻の實

雫青し或は赤し櫻の實

御千度の數取やらん櫻の實

土産にせん此一里の櫻の實

椿の實仰のけば笠を打つ嵐

林 檜 都にも真葛が原や藪椿

藪 椿 咲けばとて花には折らぬ神かな

柳 都にも真葛が原や藪椿

青山椒 壺平も寺の料理や青山椒

雨つぶく青山椒のつぶくや

夏 杉 夏杉の皮肉隔つや汗油

若 杉 若杉や入梅晴の露實にも色

牡丹 千雨の石を見趣して牡丹かな

真晝に大手ひろげる牡丹かな

日の前に牡丹の花の散りにけり

龍の玉掴む牡丹の荅かな

月の夜に牡丹の花の散りにけり

十分に咲てあぶなき牡丹かな

幼姪より句を望まれ

笑ふ顔見れば牡丹の荅かな

二つなき花を見詰る牡丹かな

瘦ながら葎の中の牡丹かな

笠に着てかへれよと牡丹送りけり

鳥逐ふ石を牡丹に誤りぬ

忠臣藏畫譜一段目

手に取らぬ先から匂ふ牡丹かな

牡丹見て見るく物の匂ひけり

東館公にて

羽をあふる鶴に牡丹の匂ひ哉

蚯蚓出て目にかかりけり白牡丹

一人の彦を失ひ

芍 藥 一つ持ちし荅もげたる牡丹かな

芍藥の瘦せて似合はし庵の畑

祇園百合の伏屋に尋ね行きて

姫百合や雨にかくる、藪の中

ト 居

白百合に風見付たる小庭かな

あるが中に白きは百合の匂ひ哉

宜祥寺墓前

白百合のかしら垂れけり塚の前

白百合の知らず匂ふや草の中

雨に火の燃ゆる野は爰か百合の花

澤路や人行くあとのゆれ残る

母堂二十三年

青胡桃 菩提樹の花の匂ひを聞く日哉

葉を深く音して落ちぬ青胡桃

客をとめて

病ら葉 友寝せん胡桃ひしほの馴る、迄

病ら葉や秋のみ風は吹くものか

父祖墓前

夏 草 怠りや塚の夏草膝を過ぐ

半夏生 半夏生裸虫より聞きにけり

夏 萩 夏萩やありとも見えぬ油虫

可雲兄五十年

蜀 葵 蜀葵を見ても恥ぢけりつら椿

類題

五月句集

三九

唐 葵 四 五 六 唐葵の花四五六の里の垣

讀松倉嵐園傳

射 干 崩さぬや花しほめども射干の花
唐でなし倭にあらず射干の花
賤の子の馬押のけて莓かな

高野へ行く人に

玉川に忘れてもくふ世かな
隠れぬやつふく見ゆる蔓莓

行脚田鶴樹土崎にありけるを
訪ふに逢はず一句を残す

末摘花 逢はぬのも末摘む花の頼み哉

葛の花 鎌さげし男に問へば葛の花

青鬼灯 探りたる莢のへこみや青鬼灯

晝顔 晝顔や歩行き戻て根にからみ

晝顔の這ふや古沓古草鞋

前書 畧

晝顔や無事なれば又草の屑

晝顔や湯に降る雨を花の露

晝顔の花は眉なき女かな

晝顔や朝顔のなき世にあらば

晝顔や爰らは鳴らす人もなし

墓の前に跪きて

苔の花 水かけて父に逢ひけり苔の花

雨を苔み露をつぼむ苔の花

足裏をさますに踏むや苔の花

一椽が摺物

引けば來る蓴に添うて月涼し

忠臣藏畫譜六段目

萍の花のあはれや杭の先

萍の花となり行く身ぞ哀れ

萍の花取付いて脛なゆし

藻の花の水に居直る舟の迹

藻の花や水海暮れて天の原

藻の花をかけてあがるや洗ひ馬

蘭の花や露と咲たる朝朗

夕顔や蚊のかくれ家も花の蔭

夕顔やあるじが眉もほの白き

夕顔や風は花より見えそむる

夕顔や後架に人の蚊打つ音

夕顔に瓜むく月の涼しさよ

藪ならぬ栖や花のゆふら棚

夕顔の三つ落て三つ咲にけり

炭 俵 調

夕顔や土へはつくな腐る、な

夕顔や光るものには釋迦一体

夕顔に水打てば月の出にけり

夕顔の動けば家も動くなり

河骨や一つは曇る水の底

當麻寺にて

錢投げて深さを知るや蓮の花

酒もなく女中も見えず蓮の花

咲く時葉を乗越すや蓮の花

玉水の蓮の葉走る戦きかな

此頃の目を洗ひけり蓮の花

赤神社蓮池

蓮の香に心をすく静さよ

蓮の花崩れて涼し水の上

小さくて涼しき瓶の蓮かな

升屋祐從十三回忌

其花のきざし見えたり蓮の密

散る蓮流れぬ水を走りけり

陰頼む柳に蓮の薫りかな

餅瑠璃の椀にうつるや蓮の花

其の花も頓て匂はん蓮の笠

茂り行く塚の印しや青つゞら

日和風吹くや根深の花の香

草の戸の無造作見よや苜葱汁

生立もそれと見えけり焚喰草

粟ならばさもあるべきを茶筌草

濡れ麻の竿より吹くか月の風

山荳の世にかくれたる匂ひ哉

山荳の香を忍はる、栖かな

眞菰干す門に風待つつ月夜哉

二股や抜き捨てられし夏大根

岡崎や吉田につく夏大根

手柴さしてやらうぞ角豆よくなれよ

花咲て根に待たれけり草の秋

毛の生いた葉にも似めなり瓜の花

花も實も切れて悲しや瓜の蔓

一盛り仇花咲いて瓜の花

瓜作り鳥にまほす涙かな

鳥には見られぬうりの手柄かな

仇花が雨に流る、瓜の畑

類女追悼

あな悲し焦れ切たるうりの蔓

皮一重人は汚なし眞桑うり

水瓜や皮むく音の先つ涼し

松前へ嫁入るも乗るや茄子船

夕風や下院の人の茄子切る

茄子さへ我が養へば子なるかな

棒突や江尻や茄子の馬の先

うとまる、もの、類や白茄子

是も亦浮世の世話や茄子苗

悉く南瓜を好くとおほしけり

朝顔の三葉となる間を眠りけり

海松 海打て海松捲く瀧の渦青し

うき海松の磯女を酒の肴かな

蓮根堀る水の濁りや鳴く蛙

夏雑 北向に夏を忘る、宮座かな

木かくれて浮世の憂を忘れけり

樅の木に夏に絡むや藤の花

類題

五十目大川の句帳に
雲影を宿に譲るか夏の旅

秋

時 候

立 秋 砂山や秋立初むる風薫り
秋立や夜半に物のこける音
秋立ちて日に青し松の風
秋立つやいつれの雲に杖つかん
秋立つや顔へかゝれる蜘蛛の糸
五器引や秋立つ風の小行燈
秋立つといふを暑の力かな
秋立つや毛色定まる二歳駒
秋の立つ日の橋かけや貝の殻

潤 虹 亭

秋立て萩も咲きけり二日程
秋の立つ草の穂一穂二穂かな
秋立や霰隼にうつる樹の戦き
秋立つか藪山椒の香のみして
秋立つや野の見ゆる時何となく
秋立つや唐の料理も喰ふて見ん
秋立て二日や春の迎ひ灸
風に立つ秋やしらりと萩の裏
秋立や後架團扇の夫ながら

洛羅人七周忌

文 月 文月の墨つき早し七くだり
文月や雨の中より秋の風
文月や何に添ふても辛きもの
文月は半は迄なる名なるべし

八 月 八月の帷子かゆし蠅の聲
九 月 菊有つて九月も人の驚かす
今朝の秋 等閑に思ひもせぬを今朝の秋
秋の日 桃一つ二つ落ちけり今朝の秋

秋の日 秋の日の釣瓶落しや浦の山
稻塚のまばらに照るや秋日和
秋の日も入りて程あり岩木山
秋の日や戦く目高の底うつり

朝 涼 田道行く朝氣涼じや穂の走り
新 涼 新しく涼じき鮎や朝のうち
草の戸も新たに涼し表替へ

花林子改名

秋 涼 秋涼し桂の花の満つるより
秋 暑 横さまに竹の子出る秋暑し
蜻蜒の疊すり行く秋暑し
川の香や暑さの残るもつれ草
目の覺めて物着る秋の始め哉
起き安く寝安き秋の初め哉

初 秋 こゝろよや秋の初めの素帷子
初秋やこそりて通ふる能役者
初秋や尾ひれ反りたる夕肴
初秋や坊主交じりの遊山船
初秋や茶ぼんを飛す橋の上

初 風 初秋や家建てかゝる柳原
初風や浅き軒端に榮螺焼く
初風や露ある朝の身の縮り
初風や目さめて見れば秋の風
風始めて葉を吹返す涼しさよ

初 嵐 よく寝ぬる人羨まし初嵐
初嵐昨日も嵐吹きしかぞ

秋雲 消えば消えよ風に任せん秋の雲
秋聲 秋の聲竹戸の透き間窓の破れ
秋の風 秋風や根の離れたる雲の峰

草庵 かけがねの獨りはづる、秋の風

岩 箱 立浪や岩に組付く秋の風
秋風や岩吹飛ばす外が濱
あさ顔の小さく咲いて秋の風
横さまに烏帽子飛ぶや秋の風
萱の穂をほうくらかすや秋の風
身をむしる獨相撲や秋の風

故壘野花雨 犬蓼や田もなき里の秋の風
仙人掌よ汝秋風を知るや否

前書略 蒲の穂や長き短き秋の風

雄鹿孔雀窟 鳴り込むや岩屋の口の秋の風
秋風や逆羽立ちたる鳶のさま
川島に皮剥見ゆる秋の風

宮 怨 秋風や片足いつの上草履
黍の葉の葉に葉削るや秋の風
秋風の立つや木の影草の影
あんべらに秋立風や夢心
秋風やいとはぬ宿も金葎
秋風や何處ぞで雨をこぼし行く
秋風の石を細ける木賊かな
日をこぼす林の中や秋の風

秋風や軒にかけたる古柱
秋風や人の呉れたる祇園串
吹く風の中より吹くや秋の風

二百十日 雲尻や秋風凄く月早し
秋風や耳ある儘にやかましき
中空や雨に押合ふ秋の風
白鐵店の光り過るや秋の風
秋風や鳥の雲路の陰日向

山にても猶うき時は 山陰も陰ならず秋の風に吹く
小養庵長翠に訪はれ
簑かくる折釘打たん秋の風
秋風や四五軒隔つ川燒藥

京にて 尾肆の四條通りや天の川
天下晴れて忍ぶ夜はあり天の川
一月斗り雨降らで此の日白雨しければ
百姓も今宵はぬるらん天の川
暫くにて白雨
ひとさばら涼しや天の川清め

雨夜の病に 桐の葉を敷團にも敷け天の川
書たもの反古にするな天の川
七夕發熱 仰に寝て銀漢に身を冷さばや
銀漢澄めるや長き犬の聲

甲州一雨訪はる 天の川富士の前かな後ろかな
鳥一ついつくへ飛ぶや天の川

稻妻の殿

一と夜／＼あらばになりの天の川
 夜や更けぬ落るは天の川風か
 更け行くや川に落ちたる天の川
 水蒔きて林す、かん天の川
 碁石して庭にうつさん天の川
 雷のあとに流れて銀漢
 鬼灯も色付にけり天の川
 寝時分や川のみ見えて天の原
 木の空に流れて白し天の川
 威角栗に松の戸すめり天の川
 見れば長し思へば長し天の川
 天の川住むものならば鮎ならめ
 稻妻や壁に動かぬ蟋蟀
 稻妻や入江の舟の高調子
 稻妻の雲に收まる月夜かな
 稻妻や峰を崩る、雲の中
 稻妻や浮蜉流る、水の上
 稻妻の野草に沈む夜明かな
 稻妻に馬牽き行くは親なしか
 稻妻や當つて消ゆる落標ろくせう
 稻づまや雲の重ねの批もせん
 稻妻や尻込になる夜明かな
 稻妻や之にも通ふ袖の針
 稻妻も遠松原や鶏の聲
 稻妻や淺妻船に柳蔭
 京の女中稻の殿とぞ申しける
 稻づまや日暮里遠しむら薄
 無常迅速

稻妻や此の世に橋を渡る人
 稻づまや鶏鳴く松の遠林

霧

稻づまや當て戻る不明門
 稻づまやいと乾ける石河原
 稻づまに淺し淺茅か蘆籬
 稻づまや川沿里は小家勝
うかれ女に扇に書て望まれ
 宵々やいかな人を稻の殿
 野を見ばや稻づま届く處まで
世を去る人多く
 稻づまの眉に燃えつく思ひかな
 稻づまの届かぬ山や届く山
 芭蕉垂れて稻づま遠くする夜哉
 稻妻や寢覺める殿にふりかゝる
 稻づまや切りすかしたる平林
 霧の外やとんぼ群る、旭影
 霧に濡れて旭に山の匂ふ哉
 髯に山霧白く露長し
送美丸法師
 川霧の絶間もかもな遠目鏡
 さそはれて霧も落るや山堤
 朝霧や小里の犬の念佛鳴く
深浦の里程早月に身まかり
 しを追悼
 霧雨や早月の程を思ひやる
 霧晴や野架に鷹の聲立る
 むさ鮫や霧に香をもつ濱庇
 晨明の霧脚早し鳥崎
 轉び合せて一つになるや芋の露
 露深し菌に這べる山の腰
題 問 怨
 金物の露に錆び行く妻戸かな

沙鷗一周忌
世の辛み繪に残りけり夢の花

哭養母

消ゆる朝のいと清かりき朝の露
今朝の露はつき、白くなりけり

美人の畫

羅に初露かゝる姿かな

五右が妻を悼む

露握り行かん草野を十八里
朝かほの是にも露や牛の角

朝かほに稻妻に露となりけり
篤と霧見らるゝものは朝かほか

錢野了素大

三日月 三日月の羽黒に問へや圖師か跡
三日月を暫く見れば秋の風

月百旬の内

名月 名月や八幡の九輪空へ付く
名月に家捨て、出る寄居虫かな

名月や屋根突のけて伏見船

机上に月を祭る

名月や香爐の烟いと長き

進藤氏の樓上に前川の満光を

眺めて

名月の淺瀬も遠き光りかな

名月や碓の釜に鶴鶴

名月や大百姓の背戸の川

名月や晝より高き海の原

名月やちらりと沖の岩かこら

雄鹿宮島

名月や貝附ならぶ岩の際

一樓をしつらひ

名月や背中休むる嵯峨柱

名月や馬牽き渡る川の隈

名月や手に取て見る硯箱

明月や水よき里の茶の匂ひ

名月や城あり寺ある田のあな

名月や木にかけて見ん猿をか

名月や木賊の末の露の數

名月やありふる松に人の聲

名月や隣は遠き鳥屋敷

名月や終に失せたる唄法師

名月や南になれば川の音

名月や羽織冠りて達磨達

海豐年

名月や網に引いたる二萬兩

名月や見る見る行けば野に出る

名月に得たり賢し川鱸

名月のさしてとれけり目の

名月や鐘かけ松の目に浮ぶ

明月や宴そめし祭町

名月の樓に登る玉合

名月や思案をからん膝頭

名月の出るや杉の若林

名月や夢の類ひも花の露

古基盤床に直せや今日の月

今日の日

今日の日

小繫にて
馬士の念佛尊し今日の月

長病後
見られまいと人も言へし今日の月

此の一夜いたくな更けを今日の月
今日の月祇園にせばや新豆腐
六十の目にも雲なし今日の月
柴折戸に入れば藪なり今日の月
薫をたく乞食あり今日の月
烟管やなるもならぬも今日の月
良 夜

雨をもつ雲にも奇なり今日の月

月今宵

舎利といふ米や今宵の今日の月
月今宵草に睡るや火取虫
月見れば夜とも思ふ今宵かな
摺鉢の底まで月の今宵かな
月の今宵天兒祈る主じかな

月

良夜初得鮭
氷頭脰是や今宵の月の花
多賀城の古瓦を硯にして
うらぶりて海新しや千々の月
一輪の月を動かす尾花かな
ぼらはねて月新しく流れけり
馬蠅の人をめくるや磯の月

大間 越 關
月澄むや海へ寝に入る山の影
明るまで月を碇の關泊り
題 車
月の夜を敲き明すや鳥羽大工
齒を漏れぬ謠美はし秋の月
泉 湯
九十九の森の緋りや月一つ

書 面

夕月や龜這ひ歩行く小松原
草の戸や月さし入りて誰もなし
杖にせん童もかな瀧の月
町中の川抗凄し月の影
雄 鹿 山 橋

巖橋や海へ滴たる月の露
古川や芦根の月に鯨鳴く
世間寝て見るべき月になりけり
迦ぼる鮭に月飛ぶ早瀬かな
雲二分水三分の月夜かな
中 村 吳 來 道 惲

釜さめて忽ち月の影悲し
月既に遠山寺の太鼓かな
澄む月や杉の實見えて風落る
雨もろく雲もふけたり秋の月
秋も立ちぬ月は松島か象瀉か
嵐来て今宵になりぬ雲の月
鼻かみながむる月の木の間哉
月見れば親ある人ぞ美し
題 松 島 内

松島や雁かね奇なり月奇なり
鏡 野 了 素 大
心さらせ雲より上の月の山
髪ぞ憂し月につむりを叩く時
望 夜

見る夜こそ月もみかきて出る哉
虫に目を蝨さればしすな月の秋
月澄みぬ夜立の馬の鈴
虎 眠 の 招 き に

月の秋寄居虫螺 の家をか
骨叩く屠所のあたりや雲の月
芭蕉葉の隅を盡すや月のもと
千里の旗より歸りし大館の石田氏に
鶴の脛休めて千々の秋月

悼露 釣

無月 聲悲し月なき松の夜もすがら
月を忘れ我を忘る、夜雨かな
頼まれぬ世がな月かな秋の空
雨ながら寝られぬ月の今宵かな
雲空も常ならぬ夜や月明り
十六夜餘所の月見の貰ひ物
十六夜も眞坂になりぬ舟の上
いざよひを夜着引纏ふ風薬

夢鶴先生婚を結はれし喜びに

小望月 きのふ植ゑてけふ松陰や小望月
後の月 澄み切て萬里ひそかなり後の月
白霧になるべき秋を後の月
雲早し見るも名残の月の空
水海の静や月は後ながら
雲去りぬ鶏鳴て後の月
楨の木や松に見し其の後の月
心なき雲や名残の月の宵
更けたるも思はず月の名残かな
橙にさへ名残ける夜を雲の月
新らしき小家も見えつ秋の雨
一日の雨より秋になりけり
竹の實に赤らむ垣や秋の雨
秋雨や聲々ながら錆鐵
萬橋

野をうつす庭の静や秋の雨
寢覺めく薫たくや秋の雨
今宵もといはる、雨の秋となりの
津輕玉子の母を悼む

秋の山 離れかねて雨ふる雲や秋の山
秋の山錐で書たる姿かな
蟻折々鳴て暮る、や秋の山
上は走しる秋の山兀ひそかなり

秋の野 傘を干し乍ら行く秋野哉
憐れ見よ秋の野つらいた子行く
可來母を悼み

秋の夜 寝られまじ寝ずは秋の夜いか斗り
湯澤にて

長き夜 長き夜や隣と語る壁の透き
長き夜の鼻毛に息の障るかな
犬切に行當りたる夜寒かな
老懷

野分 預からぬ事をも思ふ夜寒かな
はつたりと机を叩く夜寒かな
あぢきなき墨の砂かな夜寒かな
持ち力なきや夜寒の杖かしら
地へ落ちて鳶のよるめく野分哉
草薙の野分に風の劍かな
海赤く野分吹入る烟かな
野分くらく鷗亂れて聲悲し
雲裂けて月吹落る野分かな
一曇り野分押付千鳥かな
日はくだつ袖に胸覆ふ野分哉
かれ聲や野分止む夜の蟋蟀

秋の暮 秋の暮寢言に似たる 謠ひ物

祐忠兄 一七日

手から物落す斗りや秋の暮
捨菊や畔を枕に秋暮れぬ
瘦せ黍ふじく折れて秋くれぬ
木兎のつくくと淋し秋のくれ
秋のくれ垣根の蔓の薯堀らん
近付の柱によるや秋のくれ

鷺雪老人を悼む

人事も思ふなりけり秋のくれ

秋の夕 定めなき秋の夕や朝夕

初潮 初潮やとても野に臥す旅衣

秋潮 秋潮や鷗かたよる草の月

観 泚川 文略

秋の川 海近き日の悲しさや秋の川

秋の水 菱黒く底すむ秋の水寒し

落日 月代や里々さされて秋の水

秋名残 田の口やたなご平目に落る水

月見るも秋の名残りは悲しきを

京へ申遣はず

秋の名残何し 梢の天狗達

虎杖や杖にけれ行く秋の霜

小野寺氏父二十七回忌

菊かれて秋霜いくらふる高園ぞ

秋霜や熊の棚より置初むる

露霜や鶉の聲もこはり行く

杖になる草を尋ねん秋の末

秋の末 粃臼の音斗りなり秋の末

秋 秋盡さる日の影寒し雲に鳥

行秋 行秋や後ろ向かれて岨傳ひ

行秋や杖にもならず黍の竹

行秋や河原蓬のしらかれし

行秋や出さへすれば杖に傘

行秋や枕を穿つ海の音

行秋や朝々毎に蠅の骸

前書略

手の平に物書きつ、も行や秋

行秋を豆腐あぶりて惜みけり

行秋や眞菅赤らむ馬泥浴

人事

八朔 八朔は鳴子の繩も遊ひけり

東武行脚活山宗匠百雲亭に節を曳かれ「雁よりも先にたのむの秋田かな」

とありけるに

田面の日 一と躍りせやたのむの音頭取

渡り来て鶴脛のばすたのも哉

盆雨晴れ豊作

月見月朔日晴や先つたのも

八朔田家より米一包持来り

米粒に發句書ける頼母哉

九日 九日や菊の機嫌を取合せ

花火 一ふしの竹に種まく花火かな

題明 智光秀

咲きて散る榮花一時の花火がな

行く水に數書くよりも花火哉

星祭 今日早や秋風吹きぬ河花火

夜毎なら浮名は立たじ二つ星

七 夕

逢ふも鵲別る、も亦鳥かな

類題

五明句集

四八

糸屑の取付く星の別れかな
びいごろの筆して貫ひ星祭
芭蕉葉に畑物盛らん星祭
星台の影や木綿の川ざらし
のさくさく犬の來にけり星祭

七夕
七夕や花火とほして小頃城
七夕の雨に星入る小袖かな
七夕は風待つ友に更にけり
七夕や燈籠下たる棧の露

箕に白き親子を伺ひ

七夕の甘瓜とらせん嫁が君
七夕ぞ尺八吹給へ普化の僧
七夕や音して落る桐の露
七夕や水に月さす銀屏風
京中の小袖はいくら女七夕
七夕も過ぎて寝安くなりけり

刺鯖
祝は、る身も刺鯖の鹽さびぬ
祝は、るさへ刺鯖の哀なり
惣々へ箸一膳や魂祭
土器の數々淋し魂祭

魂祭
一旅のはしり淋しや魂祭
今は衰へたる人の許にて
心なき花しも咲けり魂祭
あぢきな白の西瓜や魂祭
脚のある膳は誰々魂祭

魂棚
魂棚や蚊帳を隔つる古屏風
墓棚や口に飽けども鳴く鳥
見え透くや聖靈棚の簀の九重
生身魂影は見せまじ鏡汁
見て見よきものや生身魂
送り火や薄くれ方の人の影
聖靈に別れて蠅も淋しいか
青麥は召さる、ものか聖靈達

相撲取の長き羽織や墓參り

貧賤を憐れむ

燈籠
露の宿燈籠一つの明りかな
世移りて見る物なる燈籠哉
めぐり來る哀とも知らず影燈籠
藪越してあはれ見するや高燈籠
洛外の藪のけしきや高燈籠
高燈籠名残なる夜にあめのふる
消えがてや夫の吠え出す高燈籠
朔日も朝から淋し高燈籠
夢人や切籠の下のなき姿
切籠
茄子祭
あぢきなる茄子奈や芋殼箸
芋殼箸
鳴焼に茄子奈は止めけり
里は皆是にすはるや芋殼箸
上手より下手の目に立つ躍かな
朝明や躍屋臺の竹の露
人越しに躍見あるく足駄かな
躍る手も年々かはる世の中や

盆
太鼓なくて躍の腰や折れにけん
盆過や水引枯れて道の露

悼士肥已江

盆過や茄子の色の先つ淋し
接待や袴着て居る相撲取
秋彼岸 秋の彼岸漸々大根なる大根
相撲 有ふれた名も珍らしや相撲取

世の中を帯解前や相撲取
乳の毛を大事がるなり相撲取
そへ〜と着る物着たり相撲取
いかに世を獨り相撲の狂はしき
稗を喰ふ故郷へ来たよ相撲取
ある法師相撲と友寝樂しめり
物言はぬ人思はしき月見かな
盃の蚊を吹飛ばす 月見かな
己が住む漢をすて虫の月見かな

錢北海房文略
桃喰らへ再び共に月を見ん
休めたる白に腰置く月見かな
傾城に引板をひかせて月見哉

月道都の方へ行くに
月見つ、行くらん駒も牽く頃ぞ
よき馬を買うて酒くむ月見哉
犬も來て匍匐ひて居る月見哉
戸一枚屋根にかけたる月見哉
木うつりに敷物うちる月見かな
夜刈する田子に酒やる月見かな

謂天亭得新文臺
月見ても匙にも文の臺かな
月見つ、ありしを雨の寢覺かな
有明の炭團をいけて月見かな
苜蓿ふ稻の匂ひや日和風

葛三に次ぎ春鴻を送り

稻刈に紛れて笠も見えずなりぬ
百挺の稻鎌分つ朝日かな

稻風や初刈鎌の競ひ聲
稻舟や夕入る月に雁の影
稻舟や寺より出づる獅子廻し
今年米 一袋世を知れとてや今年米

送文貫
燒米を噛みや越ゆらん九重の岨
今年糠 いやすなれど縊る枕や今年糠
秋蚊帳 秋も未だ團扇の音や蚊帳の内
子を負うてさがす砧にもる乳かな

隣家
むらさめや宵のいさかひ小夜砧
秋しむや砧打つ音笛の音
去年よりも今年は寒し小夜砧
砧なく傾城ならば友にせん
後夜頃や砧のわたる瀬田の海
狼の聲離れたる砧かな

樹下打砧贊
干瓢も仕舞うた里や砧打つ
草履低く足駄は高し砧盤
衣うち〜隣の富も美ます
親寝せてきぬた打出る木下かな
鷹打の心長さよ觀世縷

西光寺御堂建てけるに
鳩吹 鳩吹て音に懼たる御堂かな
淋しうて鳩を吹くかよ鳴子引
宿世如何にかくも搔る、漆の木
毛皮着て唄歌ふ見よ漆搔

漆搔 宿世如何にかくも搔る、漆の木
毛皮着て唄歌ふ見よ漆搔

動物

鹿 日はたけて鹿の振ふや杜の露
鹿鳴いて尾上の杉の尖りけり

簷峰下鹿群

鹿 山陰や稗殻嘗むる背戸の鹿
瀬に立て鹿潮振ふ夜明かな
日さすや岡田の鹿の口ねぶり
ことし子の親鹿呼ぶや村薄
鹿の聲折から月の細き夜ぞ
鹿飼うて盡さまほしや秋の晴
潮尻やあめの崩れに鹿の糞
野林や海見え透いて鹿の鳴く
夕晴れて畠山くらし鹿の貝
鹿の尾にあるかなきかの磯の月
はら雨や鹿の星色のあらはなり
鳴けどだに思ふに里の鹿の顔
有明の露甜り合ふ小鹿かな
あめ近くすみ行く山や鹿の聲
目を見れば顔をむけ行く小鹿哉
あめ晴や坊主合羽に鳴く鶉
粟の穂の折る、ばかりや鳴く鶉
豆刈らぬ片そけ山や鳴く鶉
菜黄原や虹立つ中に鳴く鶉
道ばたに鶉出て居る朝かな
明方や鶉なき立つ右左
むら降りのあめ見えてなく鶉かな
なく鶉野は花ならぬ草もなし
瘦たれて鶉なくなる畠かな

鶉

送 鶉 秋

鳴

鶉立つあとは一穂の薄かな
よし迷へ鶉の聲を道にせん
雨されの野末明りや鳴く鶉
鶉鳴く昔し戀せしあたりかな
僧につれて行く日は鶉聞きにけり
山見ゆる夜風ふけらし鶉鳴く
鶉吹く横日に赤き草穂かな
一と日野を見に出て鶉放しけり
秋しむや曉かけて鳴く鶉
いつの水に星は流れて鶉鳴く
着て立てば鶉に似たる小簀哉
露振ふ顔の小さき鶉かな
鶉寒し穂切のあとの豆畠
宵ながら鶉更け、り草の宿
我に立つ鳴と思はぬ夕かな
鳴鳴くや薄交しりの稗田づら
ほと鳴や菽葉散り行く磯畠
あめほろ／＼尻なき鳴の音や虹
鳴越えしあとか山路の鳥の糞
磯鳴や遠くも飛ばす波明り
鳴は物かは蛸瞭澤の秋
鳴立つやあめにかしがる芋莖畑
夜明さへ鳴立澤の小目のくれ
鳴突に鳴の睡の移りけり
鳴の鳴く傍へ行くまで薄かな

雁

松 鳥

雁 松島に讃をするもの天津雁
宵闇や人をとがむる小田の雁
雁一つ淋しき文の封じかな
初雁や里のわらはをそ、のかし

類題

江村片雨外

我のみに鳴くか寢覺の虫の聲

病中

心冴えて目蓋冷るや虫の聲

曉の虫の音糸を裂く如し

海更けて遠藻の虫の鳴音哉

蚊帳に風の入る夜より虫の聲聞ゆ

前書略

目に心すみ行く虫の鈴音かな

草の戸や西瓜の核も虫の聲

南樗に對し

古筆の虫も鳴よらん草枕

虫鳴くや思ふより見ゆる夜の富士

草の穂や長き短き虫の聲

老懷

虫の聲耳に聞えて老かなし

蟋蟀鳴くや二瀬の別れ鳥

蟋蟀猫の躍る夜鳴きにけり

薄物の薄くなる夜や蟋蟀

蟋蟀鳴くや月澄む夜眠

草の穂の月をすゝるか蟋蟀

飼ふまじや友喰ひ破る蜚

山窓に旅寝して

味噌汁に哀を見つる蝨かな

鈴虫や殊に需めぬ草の中

鈴虫に伊周の君が嚏かな

庵を繕ひ老を思ふ

蟀の鳴き細めたる柱かな

茶立虫心に物のなき日鳴く

茶立虫心に秋の立つ日かな

是とても耳の垢なれ茶立虫

藻に鳴く虫藻の中の残れる花を聲のあや

蟪蛄の怒ほとけば蟋蟀

月夜よし蚯蚓につれて諷はばや

蟋蟀なくや人來ぬ菊の月のさす

肩衣をかけて休らふ蜻蜒かな

蜻蜒よ雨の降日は何處に居る

水平魚飛

蜻蜒のすはりてありく夕日哉

白岩の盈れて蜻蜒飛びにけり

七月十一日洪水

雲風や蜻蜒取付く芦もなし

蜻蜒のこぼむ木槿に止りけり

蜻蜒の朝夕薄き姿かな

蜻蜒の秋に生れて羽薄き

忠臣藏畫賛三段目

蜻蜒の二つ並びし眼玉かな

二日ばかり失せて又來ぬ秋の蠅

長翠が筆はしらす傍にあり

秋の蠅墨を貪る心なし

鯖賣のこえ夕暮ぬ後の町

砂川や沙魚見え透いて日の靜

申蹴いなごも一つ交りけり

先づ問はん蘆の鮒や初紅葉

太刀魚の來初めて物のすまじき

植 物

散 柳 羽織看て着屋來たり散る柳

朝 顔 朝顔や能くも垣根にはさまらず

吉田の法師の詞を思ひ出で

つくくと朝顔見れば恥多し
朝顔に骸あるこそほろなけれ
朝顔にまかする露の格子かな
實の末の朝顔の花のやつれけり
朝顔の花は輪に吹く烟草かな
こちらへと朝顔に竹のべにけり
朝顔の白きは尼の姿かな
朝顔を狂はす人ぞ狂はしき
日の鼠先つ朝顔を喰てけり
朝顔の涼しき内は我が庵ぞ
或醫者の朝顔の花を嫌ひけり
朝顔も朝々咲かすなりにけり
朝顔に雨さそ降て淺黄空

忠心藏書八段目

木 槿

朝顔の果敢なき露や縁結び
朝顔の花の見る内丸きうち
朝顔の花咲初めて目はすみぬ
朝顔よ翌よくと何急く
朝顔に稻妻残る哀なり
朝なく朝顔見ても油断かな
日は花の中よりくる、木槿かな
隠士を訪うて
起き臥しも木槿の宿のあるじ哉
開くより木槿は昨日なる姿
観 想
咲にけり木槿の花は咲にけり
人に心付なりけり夕木槿
悉く咲ても淋し花木槿
眠りても目には離れぬ花野かな
花を見て行くや命の藥草

秋七草 女郎花

風筋や草の初花はの見ゆる
花稀に摺れ合ふ音や草の風
草凡へて亂れ勝にも花咲きぬ
百景母十三回忌
七草の花揃ひたる手向かな
通照落馬の畫に
山吹の色にこりずも女郎花
女郎花月見る岡のそよきかな
女郎花むら雲影の野面かな
里遊 尼に
花散て男になりぬ女郎花
草々の夜に入る中に女郎花

前 書 略

桔 梗

山椒は鐵漿をつけるに女郎花
女郎花折れば雨降る野癖かな
道なくてイめば見えつ女郎花
日の暮やこぞりて見ゆる女郎花
金光寺にて
一重こそよけれ桔梗の花の色
開く時音もしつべき桔梗かな
花咲て野草を出でし桔梗かな
悉く桔梗咲きけり霧のひま
私に申さば色は桔梗かな
曙や殊に桔梗の花の色
金光寺にて
長き野や桔梗ならしつ萩折りつ
萩桔梗旅を忘れて手折けり

萩 薄

盗人の住む野にもせよ萩薄
萩薄老行く秋を問はれけり

前 書 略

訪 或 人

萩薄此人も亦有恒か
萩薄私ならぬ秋の野や
荻萱に尋ね當れば日のくれぬ
散る萩の花のかくすや鹿の糞

訪月 通庵

雨の戸を敲けば萩は起にけり
夕萩や扇載せればよき撓み
折て見れば似付くもあらず露の萩
木萩立つ山田静げし夕雀
誰か誠遊女の塚の萩の花
見つ、あれば萩の初花風を呼ぶ
萩堀に行々忘れて月夜かな
一こぼれ盈れて萩の盛かな
起返る小破の音や夜の萩
こぼる、も構はず萩の静なり

今年も秋宮の萩に招れ

菊

野に咲ぬものなら萩よ花の花
年草と思はれぬ萩の盛かな
恨むらくは萩の主じの琴弾かす
萩中に懸ても見たし大鏡
下た／＼に甘露降るらん菊の花
相手には豆腐ばかりや宿の菊
世にはやす花さへ菊は菊の花

病中 賈菊

さかやかに置くや九日の菊の綿

思 陶 子

隠れたる名を顯すや菊の花
白菊に手垢のつかぬ山路かな

九 日

花に罪作るとは知らじ菊の虫
菊苔む宿とこそ知れ細格子
稻かけて菊静かなる木かけ哉

山崎某が山莊にて

山垣を漏る、や菊の水の音

市 隱

菊をさへ貫はずは見すなりにけり
淵の菊水玉越る動きかな
山人よ其露買はん菊買はふ
世に早し花さへ菊は菊の花
菊伏すや茶の木島行とまり
白菊の玉に動くや瀧のへり
糠あをつ隣り心を菊の花
菊植て花に構はぬ栖かな
かつきたる雨や盛りの菊の花

可雲三十三回忌

生残る菊も乏しき手向かな
九日は少くなりぬ菊の花
雨に動く菊静なる盛かな
過きたる刈ればけふなり菊の花
年々に愚かになるや菊の花
菊の名は妻に預けて忘れけり
日に逢ふも逢はぬも浮世菊の花
菊の花捨て、置ても草ならず
摘む菊や女隠居の明り取
菊の香に目は闇ならぬ寢覺かな
世につれて行けども菊は静なり
我が菊は末の九日になりぬらん
菊を好く女俳諧の句もすなり

洞雨亭

月含む菊も奥ある匂ひかな
白菊や色あるものはさめ易し
そんじよそこそ申菊こそ菊の花
我が菊は煩はしくもなかりけり
悼津輕玉子父

白菊の其の日過ても光るかな
京種や人のみならず菊の花
乏しさの身とは思はず菊の花
我が植し菊と思へば見られけり
菊提けて道々見るや小提灯
養老のかつけ綿頂ける人に

まめやかに簪採る人や菊の花
我が菊は我が書く菊に似たる哉
人訪ふも菊ある内や老の足
可來を悼む

昨日ありて菊は十日の佛かな
不沙汰して居ても菊は貰ひけり
我が野良を恨まず菊は咲にけり
菊揚げて中に寝ねしが寝入られず
色なるも色に誇らず菊の花
病中の九日二章

目をあいて菊は盛の且かな
菊雁に夜は苦にならぬ寝巻哉
蘭の香や家に傳へし墨硯
人の心收まる花や田の面
早稲の花天の河影落けるか
髭黒を稻とは知らず源氏讀み
花箱神社奉納

八束穂を舞の乙女がかざし哉
雨の中に落穂拾ふ子や繼子

秋海棠

深窓のかこち顔なるや秋海棠
秋海棠莖より花にありにけり
秋海棠七夕草といはまほし
秋海棠化粧の水や花のちき
芝引の主より一株を得て

鶏頭花

姿申さば女の顔や秋海棠
日に垂れて露々しさよ秋海棠
鶏頭花の平たくなるや秋の霜
鶏頭や鳥仕舞の小酒盛
翁の碑を築きたる日

芭蕉

秋に破れず風に動かぬ芭蕉かな
日向あり陰ありて芭蕉静なり
芭蕉裂て蚊一秋を鳴にけり
八森不動瀧

龍膽

岩を巻く蔦を御注連や不動瀧
齒の惱み蔦の丸屋に忘れけり
龍膽や物思ひなる花の顔
龍膽や低うなり行く草の中
野草は大方過行けるに

龍膽

龍膽よ彌勒の出世待てかよ
龍膽よ秋は少なき風の中
檀特や雲の爰置く岩の傍
侘寝せよ蚊帳釣草の露の宿
五味子もきてほづくば風を吹く

弟切草

あちきなの名にぞありけり弟切草

薬師草

人の爲と花見て置きぬ薬師草

胡黄連

胡黄連に鼻雫れたる野風かな

粟

粟の穂の雀を招ぐけしき哉

苺

花捨て、烟にいそく苺かな

内心如夜刃といましめ給ふとかや

蕃椒 恐しの瓜 紅や蕃椒

鬼灯 益良雄か鬼灯鳴らす夜船哉

紫苑 紫苑より餘りて蛇の鳴く音哉

は、き、き、に去年に掃かる、今年哉

は、き、き、の實のすけなさや一盒子

泥の香や小虫あつまる穂蓼原

蓼 蓼の穂や是も捨ねば秋の花

芋 蛸に似た天窓よ芋の鼻主

若荷の花 忘れては花咲せたる若荷かな

葵 日向葵ごこやら淋し後ろつき

紅葉 潤風や枝吹上げて初紅葉

梅の葉や薄色付いて悲しみあり

百雪亭に杖を停めし東武の

合歡堂を送り

此の素にかへる葉もある紅葉哉

物陰へ廻れば寒き紅葉かな

萬固山眺望

寺深し山構へたる夕紅葉

山松や紅葉隔てず交はらず

湯澤初女が伏屋にて

水いさ音聞く軒や檜紅葉

素顔にて藤六來たり梅紅葉

泉にて

山は屏風紅葉殆ど紅葉なる

山根經て行く水長しむら紅葉

性吉宮造營

傾城も來て染みつらん宮木立

題 添 川

小村には勝たる寺の紅葉哉

三猿の畫

木の實 山窓に木の實拾ふて静なり

梨實 梨子はやす中に梅ある事知れり

柘榴 七倉の峯は柘榴の裂目かな

追悼 柘榴うし物喰こぼす寺や是

齒に似たる柘榴を見るも涙かな

葡萄 白葡萄幾露霜の滴りぞ

椿の實 實を落す椿の中や咳拂

楓 楓や色付初めて夜風吹く

漆 古寺や秋の日かする漆染

茨の實 茨の實や風によろめく蟋蟀

梅嫌葉散 己が葉の散るとも知らず梅嫌

柿 浅水や澁柿淀む石の間

栗 稻扱よ前垂借らん柿剝かん

朝晴や栗美しく三つ五つ

詠を望まれ

西瓜 井戸掘りて西瓜庵ともいへばや

肩衣に前垂したれ西瓜賣

妓王 妓女

茄子 茄子出て世にうとまる、豆腐哉

種茄子蒔しどけなし秋の霜

雨もろき秋の茄子や蒔の底

夕顔の實 夕顔や實を惜む人花見る人

鳥瓜 鳥瓜鳥も見ずや色のつく

糸瓜 或美人糸瓜に契こめにけり

瓢 なまふくべ叩けば答ふ風情あり

薄

浩宗をとめられし百雪のぬしに

鶴の脛さすりて寝せる花薄
見定めん十寸穂くの花薄
穂に残る日の静なり花薄
夕照や行衛も知れず薄飛ぶ
夕暮や露のためたる花薄
穂薄の波に交るや秋の水
願れば却々白し花薄
あざ見ればあど又白し花薄
穂薄老か頭も逆川
日の筋や物にもつかず薄散る
穂薄や野末の雁の聲も露
水音や薄夕澄む山の峽
咲かぬさへ淋しきものを花薄
素鞆を着る人いくたり村薄
花薄鬼灯を吹くけしき哉
花薄風が吹かねば淋しいか
人負ふた人見えにけり薄原
風を行衛月を行衛や花薄
うつめとて我を招ぐか花薄
野境や薄の傍の金氣水
世を輕う住なす人や薄垣
手によきて行野果なき薄かな
穂に出て海の際まで薄かな

尾花

前書畧

海見えて尾花笠打つ雨烈し
ゆすり行く風や一野の夕尾花
蝦落す火かしら見ゆる尾花哉
馬で來る赤き法師やむら尾花
尾花立つ千羽雀や鬼曇

蘆 萩 菌

馬鹿鳥鳴くや蘆の穂出しの濱嵐
萩の葉や吹盡したる風の形
雨の中菌提げ行くおさめ哉
日のうととき野谷地の道や白菌
又とるも片割月の菌かな
白雲の舞茸負うて山路かな

路丸の江都より歸りたるに

草の實

武藏野の袖の草の實何々ぞ

題藤房卿

蓮實飛

蓮の實の臺を抜けてそもいつこ

月下對僧

蓮の實か月見つ、あれば水の音

獨り残りし友に逝かれ

實は飛であなあと悲し蓮の臺

秋の錦

騎馬祭秋の錦の魁か

末枯

花稀に風凄く草末枯ぬ

九月 盡

秋 雜

綿弓や淋しき秋の町はづれ

秋もはや一ふし白き木賊かな

噓や秋になりたる朝ほらけ

降る雲もこゝら見よ秋も二三日

江村片雨外

しらくど日の照る雨や浦の秋

鳴はものかはつくくほうし澤の秋

雨た、く蕨根寒し澤の秋

着る物も定まる秋になりにけり

錢野了素大

幾秋の思ひや戀の山詣

國道碑指本を得

石の霜千歳せの秋の匂ひ哉

類題

五朔旬集

五八

何見るぞ梢の秋の一つ 齋
朝夕は昨日にもあらずけふの秋
日の影や秋のイむ浦の松

新川觀水役館にて

暑さへ秋になりけり川嵐
とつ付の秋に目立つや曲り家
錆しむや秋になりたる開き鯖

靈芝を得

老が秋靈芝を摩姑の手にやせん
秋も早や柚味嗜しみたる時雨哉
秋淺き河岸ぬる、戻り水
老か秋席をふさける火鉢かな

恒成亭

秋とても若葉目出度き椿かな
産物を事とする梅林某に
君か秋木の實草の實こほる、や
きらず汁秋も時雨となりけり

肥前甚角が需め

無な琴蓮分小舟月の舟
東清寺に遊ぶ
田に山に日は退きて秋靜

旅より歸りし五頁に

骨に知り身に知りつらん秋の味
秋になつて薄見えけり庭の隅
夜を夜ぞと覺ゆる秋になりけり

七倉天神奉納

澄むや秋實にも七代の神の峯

冬

時候

十月 十月の人等閑の月夜かな

十月の糠喜びや鳶の聲

十月や日暮て通ふる占算

蝶一つふらりと來たり小六月

羽織着て出る心あり小六月

青ばつて空の寒さや神無月

あちきなき朔日空や神無月

土崎金昆羅懸額
神無月神ます杉ぞいと青し

散り敷くや葉守の宮も神無月

棉弓の行燈暗し神無月

芭蕉翁忌
冬の日 冬の日に歸るや華の魂祭

冬の日や猫の髭摺る杭の先

冬の日や野水に移る家一つ

翁の碑に詣て
冬の日や木蔭佗しき塚の墨

冬の日や花なき時の壁の花

冬の日や夜寝つかぬ鼻の音

冬の日や夜寝つかぬ鼻の音

冬の日や夜寝つかぬ鼻の音

冬の日や夜寝つかぬ鼻の音

冬の日や夜寝つかぬ鼻の音

冬の日や夜寝つかぬ鼻の音

冬の日や夜寝つかぬ鼻の音

冬の日や夜寝つかぬ鼻の音

風や寛の口の定まらず
風をひねりあるくや階子賣

百泉亭

風にからかね青し窓

風や江に吹落す星の影

風や水とだえたる石川原

風や硫黄流る、石河原

風や戸を打付ける夜の音

貞享風

風や狼原を出づる月

風も吹絶えて山の夕かな

風に吹透る虫の帯かな

風に山吹の花の吹かれつ、

悼五松兄

風や思ひやらる、削り花

塚に詣で、

海川や風空を吹すます

ひそかなり川に眠れる山の影

冬 山 眠る
冬 山 青草や人里近き 冬 山

冬 川 冬川や片際過る水の音

冬 川 冬川や風に吹る、水車

撫子の花かど斗り冬河原

冬川や芥にもそます流れ行く

馬糞かれて風うけたる冬河原

冬川や日影よれ行く石の間

冬川や木棉流して子か二人

冬川や鍋墨ひそか石の隙

枝村や涸川水に芋こねる

涸沼や穂葎折さす道印

冬 沼 涸 野 人慕ふ冬の野猫の鳴く音かな

枯 野

鶴の輪に冬長閑なる野影かな

雲影のうつりて凄き枯野哉

吹く風に押かゝり行く枯野かな

むしり食ふ馬や枯野の草の音

日の色も申の下りの枯野かな

まざ／＼と爰に月さす枯野哉

夢に花見しか枯野に鳴く鶉

紅やことに枯野の鷹の繳緒

馬好きの僧乗らず行く枯野哉

くだら野や風にも連行く笠の骨

くだら野や流る、水の音細み

くだら野や一降雨の迷ひ行く

枯原をあからめ歩行く雉子哉

枯原や夫と覺しき道は水

翁息興業

冬の月 聞つるは惟然が和讃冬の月

翁息

清くしてさびたり誰を冬の月

紙幣を贈られ

冬の月見つ、うちけり空砧

丸ければ丸くて淋し冬の月

侍の玄關賣らる、寒かな

物申に内儀出らる、寒かな

海濱 快天

高岩や鶉の糞白く海寒し

溜池に行燈洗ふ寒かな

刈跡の青草寒き田水かな

石垢に日の影寒き流かな

金毘羅にて

鼻先をつまむ斗りの寒かな

草山のむしれて寒し海手風
寝仕度の音や寒さや灰篩
齒のあとへ舌の出たる寒かな
青々と乳金さぶし寺の門
花活けの口明けて居る寒哉
老が齒に蛸果てしまき寒哉
水蛸の五尺に餘る寒かな
皺寒し猿にも似たる膝頭
召出されて
結構な料理戴く寒かな
青はりて島山見ゆる寒哉
雲欄の疊に据る寒かな
東派の飛そこねたる寒かな
借り人の小袖を着たる寒かな

寒月

題三井
啞鐘の破目に寒し月の影
寒月や念佛身に立つ女聲
月籠る雲の端寒き光かな
寒月や我が鼻凄く眼にうつる
寒月や念佛獨の 魁 魁

沔る月

沔る月
沔切て小さき月や海の上
木守の柿や小春の鶺鴒の聲
恐しき蟹の缺や茨の霜
明か、る川風辛し橋の霜
鳶の手にち、めて寒し壁の霜
朝の霜木槿の帯をやごり哉
朝霜や泥足握る時の雁
霜とけや山雀傳ふくねの聲
霜晴や長うつれ立つ鶉の羽音
潮井汲む藪の一重や霜柱

寶塔寺翁碑前

世に深し塚とはなりぬ霜の花

妻に別れて

千石父を憶む

聞ぞ聞け曉の鐘霜の聲
霜風や横に裂る、紙合羽

霰

霜風の身に知られたる歎き哉
帯解きて寝たれば濡る、霰かな
今や身を裂しか霰の紙合羽
翁 碑 前
ふりにけり霰や苔む塚の芝

同 上

冬の雨

襟に霰しみくしけれ塚の前
高藪や野寺見え透く冬の雨
啄木鳥の柱につくや冬の雨
仙路訪ふ

寒の雨

這出る蠅の形見よ冬の雨
雪消て青草淋し冬の雨
つけ色の戸板平日や冬の雨
月にかへる氷するとし寒の雨
雨寒き山の崩れや墓の折れ
霰る、や雫の傳ふ牛の頤
霰る、や吹簾祭の竹もがり

時 雨

目にしむや時雨れて燃えぬ松ふぐり
ときれく虫を病む子や小夜時雨
高みから半を阿るや夕時雨
小夜更けて灰打ふるに時雨けり

貧 家
憶 隣 家

身をつめて人の板屋の時雨哉

病中 寝られねば色々聞く時雨哉

同上 寝ぬ我を慰むる物小夜時雨

海手から砂山うるむ時雨哉

時雨る、や呼へとしぶとき渡し守

追つめて星を吹消す時雨哉

矢橋別業にて 榛の殻を燃して時雨けり

鳥も居らぬ浦のもき、や夕時雨

店さきやきらす崩る、夕時雨

時雨る、や照るや鏡の裏表

南天の實をふり残す時雨哉

降る中へ降り込む音や小夜時雨

磯川や袂しぐる、小蝦とり

捨舟や時雨の雨に盈れ糶

炭竈や烟からみて行く時雨

日のさ、て白鳥凄し江の時雨

瘦脛をさすりて時雨聞く夜哉

翁 七度の時雨味ふ日や今宵

美濃風 捨てある虫田の稻や片時雨

深川集風 蘭學の看板白し初時雨

炭袋風 皮板に普請をつむ時雨かな

ふりかはり、降る時雨かな

舟一つ時雨はなれて入日かな

時雨する小村しらけて檣木かな

極樂は時雨する夜のいちろり

有体な話し聞居る時雨哉

弓取に鳴ねたればや初時雨

時雨る、やはなれ、の金屏風

雪洞に蠅の集る時雨かな

白はせて鮎寒き時雨かな

一時雨なぐれし跡や鼠壁

船塗や時雨ながらの月の影

追綱の柏子にかゝる時雨かな

にしこりの紫うるむ時雨かな

十日 ふるや木の葉ふるや時雨の翁塚

山城公追悼 結構な日和もさては時雨月

割串に鬼灯、皺む時雨かな

杉の葉を積込む寺の時雨哉

落る日の野徑よみ立つ時雨哉

月いつく集に序す 水底の鐘も鳴れ碑の初時雨

川掘の立並びたる時雨かな

片時雨背見せの江豚果てもなし

蓑虫の蓑もすけなし初時雨

冬青紫の垣黒み行く時雨哉

日の脚の尻からかわる時雨哉

行當る時雨や土堆の切通し

年寄れば時雨をたにも待れけり

飼熊の柱を抱く時雨かな

啞花に小判煮て見ん時雨かな

掃除して誰を待らん初時雨

それとても我訪ふ人や時雨好

からすみや獨時雨る、なぞへ切り
時雨行く尾より見ゆる親木哉
木にとまる宮鳥こそる時雨哉
時雨る、や僅に青き鹽蕨
一俵の米時雨る、や上り口
あふりこや奪とり喰に時雨ふる
時雨る、や頭ならべて都圖繪
けんぼなし降るや時雨の社口

師走古四王宮

北向のやしろ殿しき氷かな

堀口や氷て凄き五器一つ

佛仙追悼

誰れに濡れ誰に氷るや我が
親五器や氷をはかるさ、れ鮎
世渡りや氷の澳のいさり鮎
ひつち田や青葉折込む薄氷

悼知梁父

月消えて曉胸や氷るらし

まくりたる野くれの跡や薄氷

我が國の瓜や氷の八龍湖

岸草を引張て居る氷かな

潮邊夜泊

氷かよ衆鳥潮田鳴き渡る

弘信寺前院師遷化

星飛で松風氷る光かな

薦こめて垂氷色ある岩根かな

初雪や流行らぬ醫者の藥箱

初雪や網の目に見る田の行衛

初雪や長話して歸る夜に

初雪や青きばかりは柳かな

初雪に乞食の歌を聞にけり
初雪の降ればや庭木ほしうなる
初雪や雨になりたる客まうけ

初雪や人のイむ 枯樟

亡父の塚へ参りて

墓の雪箒に遣ふ榕かな

雨夜庵へ

白雪に見かけて遠し梅の道

朝かけや雀そはゆる竹の雪

此の町の古き人かな松の雪

悼兄

朝の雪石屋の石をやとり哉

各々の合羽新し今朝の雪

白雪や川一筋の夜の色

沙明妻を失ふ

梅折れて竹打ふしぬ今朝の雪

雪横に捨てありけり水馴樟

風呂敷を冠りて雪の達磨かな

高溝水

むすびたる跡あり雪のひと清水

山驛

雪の戸に馬の屁を聞く夕かな

獅居

市ならぬ雪の夕や物の音

冬夜清光

月一つ空に小さし雪の山

白雪や風も隔てぬ瀧の音

一盞寒燈雲外夜

火どもして友にせん雪の石燈籠

枯菊の花と見る迄に雪の降る

雪

水

垂氷
初雪

鐘細く暮て来る雪の木の間かな
夕暮や雪少しつ、竹の節
川島や松四五本の雪の朝
濡雪や跡をねちむく子持馬
見るもの、皆丸かりき今朝の雪
雪二日積りて物の音もなし
濡雪の隙に重し戻り馬
薄雪や岩根際つく鐵氣水
夜は水に沈みて雪の入江哉
濡雪の佗しや槻の片面
雪の日や雉子遊ばせる豆の糝
松の戸や折々雪の落る音
ちよつぱりと雪の閑や杭の先
雪とて隠る、日あり見る日あり
草の穂や雪にも折れず二三本
ふり初むる雪や闇より松の形
てかつくや雲より上の嶽の雪
川島や一ふり雪の薄茶色
山一つ小雪曇や松紅葉
薄雪や落葉に保つ一葉かな
今日は何を喰みしぞ雪の夕鳥
老悲し雪野の馬の松を噛む
笛をして雪の柳をよきるあり
雪の旦七辛子賣とく來たり
雪の花音ある物のなき夕
杉の雪彼入道が見越すかや
別れたる雪や野杉の虹かしら
又の日は雨亂ふりて雪かなし
一雪や裸林の月ひそか
山本や雪の旦の烟出し

木 戸

是をさへ見らる、雪や長階子
山窓や一つ烏の雪に鳴く

樓 上

雪晴や悉く見えて嶽暮る、
叩かれてわりなき門や雪の月
よせ事に鳴よ光よ雪卸し
雪籠や人ありげなき櫛桶
雪掘や窓を藥罐呼ぶ
雪の柳閑に堪えし柳かな
菊萩や刈られて雪の花の宿
人か松かあらぬか雪の山の上
附け木突く音こそはすれ夜の雪
物欲しう來て鳴く雪の雀かな
雪晴や城の灯影の十斗り
眉の雪掃いて呉れへき婆もなし
雞くま、に袂へ入るや軒の雪
日の暮や小雪のかゝる梵論の袈裟
へた雪やそれから直に日の暮る、

太平山此石ありと

水の湧く雪と山根や俗別當
雪を華に烟を捻る手向かな

無事庵三十三回忌

竹に雪の畫賛

洛城の人を訪は、や雪の竹
清水田や青草見ゆる雪の中
石藏や青草稀に雪かゝる
一ふりの雪消えて立つや雪の下

神明奉納

良々閉ちて開く目清し雪の花

海風や雪草株にしがみはく
吹付て淋しや雪の扉門
花と見る雪の降る日は京心地
雪の野や人を枝折に人の行く
白雪に千鳥のしまく曇かな

弘信寺前院師道書

冬 枯 四十九の餅は昨日や今日の雪
冬 枯の庵は 柚味噲に 蟻螂
冬 枯や只啄木鳥の 聲斗り
冬 ざれや 荏殻 庇の 風の 聲
冬 ざれや 赤田の 水の 土油
冬 ざれや 田末の 山の むら木立

悼見上某

師 走 哀さに餅搗かぬ家の師走かな

四宿棒か茶碗せめを
振舞はれたるに

佛とも申せ師走の忘れ宿
子供等と師走遊ぶや相撲取
机から離れて見れば師走なり
忘るゝや師走も鷗のあたゝまり
頼む手も來ぬや師走の紙砧
罪にもやならん師走の片貫ひ
甘酒に辛き師走を忘ればや
蠟燭で大工 慰む師走かな
引込んで居るや師走の人形筆

晋子の吟を次ぎ

浮れ女や師走は誰に靠
夢暖し師走の雨夜花を見る
火ごもして机の上も師走かな
佛より光る師走の小判かな

前書略

人の見ぬ師走の月を我が手本
袖なしは師走めきたる羽織かな
何氣なや師走の軒のよろり木
年内立春
さればこそ師走に春の馬の聲

前書略

荷を卸す師走烏よ誰か來る
鬨より出ぬ身にさへ師走かな
松見れば師走ともなき月夜かな
夜光るといふ一器を贈られ

年の暮

夜を晝になす玉見せん師走人
下た見れば轉ぶ事なし年の暮
竹なんぞ切ても見つゝ年の暮
口にはさまゝの事を申して年の暮
幼きものゝ鳥のかしらといへる
其儘鶴頭と説す

毛衣にかしらすくめて年暮ぬ
なりにけりと思ふ身にさへ年の暮
皮足袋のあかるゝ年や年の暮
世のさまの鱈の腹吹く年の暮
我に似し人を尋ねん年の暮
箒木をやるや歳暮の禮返し
脇息に世間思ふや年の暮
月雪の窓も煤けつ年の暮
花室の養ひ見ばや年の暮
綿雪をむしるに似たり年の暮
五十九の鳥居潜らん年の暮
甘いもの食うても苦し年の暮
丸墨も下弦になりぬ年の暮

方たがひする人床し年の暮
桑の門摺木にもならず年の暮
醉に酒にひとり男をさしの暮
桑酒に口も曲らず年の暮
我に苦なし我に舌あり年の暮
箴には垢も溜らず年の暮
年の暮定家の色紙二度見たり
すかきのかき暮年や琴の糸
咲せたる梅見に行かん年の暮

前書略

髭をこそ宗祇に似たれ年の暮

坂より手製の芳若を贈られ

雪を花茶の香を梅に年暮ぬ
爲す事のなき身ながらも年の暮
筆まめと老をそやすや年の暮

前書略

傾城の親にも逢へぬ年の暮

丸墨も暮行く年や三日の月

澁なしの暮にも似よや老の暮

能なしの猿にも似たり老の暮

鏡見て我を畫かん老の暮

踏抜くな氷一重の年の川

鏝一夜年に透しはなかりけり

臘年立春或人の許にて

蜆をもてなされ

年のうちに春あるかひや蜆汁

吳年のしへの返しに

何やかやまろけて年を反古哉

年の底様ふるひ出す卵かな

頭陀かける身をも許さじ年の關

有や無や年の關路や一泊り

小町さへ老行く年の關守や

鶏の音も許さぬ關や年の關

年浪を花とは鹽の言葉かな

年浪の寄藻か、はや二見潟

前書畧

行年や年を懐に投頭巾

喚うてはふしはこしてはふし

今年も既に暮ければ

行年や我世の中の米の虫

行年や物にさはらぬ小脇差

行年も貫うてぬくし足袋頭巾

行年を苦にせぬ人やされ嘶

行年は晝寝の里もあるものを

行年や香もなき老に茶の香り

行年や書く手もたゆき白扇

行年やなど傾城の長烟管

大館百合舎追加

行年や來る年や百合の幾重ね

年の奥鹿角層を待れけり

大年や机を神に貸し申し

大年は押て來ぬる人もなし

月雪も積まる、年の梢かな

春や來ぬ年の梢の薄霞

けふし誰年の名残の一茶杓

むだ書の年の名残や懸想文

年の尾や頭にめくる車海老

笠縫よ年の止め端は何處なるぞ

年の内に春のしるしの入帆かな

若駒や春の聲立つ年の内

人 事

時雨忌 時雨せよ淋しみ好の日の今宵

芭蕉忌 芭蕉忌や月花見する雪の暮

摩忌 維摩忌や我も毛皮を敷そめん

神樂 神樂乙女小夜更けて聲いと細し

夜神樂 夜神樂の鈴ふり添ふる嵐かな

夜神樂 夜神樂やから板敷の焼ほこり

十夜 様々に空ふりかはる十夜哉

落れば同じ谷川の水

雨霞會式交りの十夜かな

神送 野の見ゆる里口までか神送り

神の留守 暗かりに留守して居るや神の馬

神迎ひ 九之助もいつ頃なるぞ神迎ひ

寒念佛 世を旅の出立なりけり寒念佛

寒念佛 から風や里離れ居し寒念佛

合羽から餘る衣や寒念佛

御影供 御影供や押揉む珠數も雨霞

顔見世 顔見世や鏡の底に燈がこもり

藥喰 藥喰是も二日か三日のもの

一日こそ二日こそあれ藥喰

鬼達の來るに困るや藥喰

納豆汁 山寺の鍋の遅さよ納豆汁

可來亭翁忌

連歌には紛はぬ味や納豆汁

生薑酒 生薑酒老美しき夫婦かな

我が夜知れ肴が柚味噌生薑酒

爐開や籬に忍ぶ料理人

爐を明けて何となく物なつかしき

爐開や瘦せて出たる火箸かな

爐開や壁に掛たる親の像

一つ爐や藥籠掛れば火は淋し

藁灰のならし甲斐なき圍爐裡哉

誰も來ず積では崩す炭火哉

胡桃炭己れ火吹いていと淋し

水戸霞谷の訪はれたるに

炭くべん唐名の君が咄せよ

芭蕉忌に

昔し今思ひ合はする炭火かな

近よりて打解け易き火鉢かな

酒臭きかさや火鉢の灰こゝり

物言はぬ火桶を庵の相手かな

さすりては昔を思ふ火桶かな

老ては淋しからんと申さるゝに

手拭を懸れば婆よ桐火桶

辨慶が打こかしたる火桶かな

割れ火桶鉢巻したる哀なり

からかつの帳についたる火桶哉

や、もすれば猿來て跨く火桶哉

火桶さへ無くて曾我讀む男かな

唐辛子燂の上や掛け處

蒸し卵なす事なけの櫛火哉

芭蕉正風宗師と證されしに

頭巾 宗師とは今年翁の頭巾哉

綿帽子 侘しいか襟に卷たる綿帽子

美丸玉斧に別る

虱もや別れ忍はん衾かな

前書略

金鷄も鴛鴦も夢紙衾

妻の喪中

紙衾寢覺烟草も難かしや
襟卷にさはるも寒し髭の音

旅 寢

蒲團 足の出る蒲團に聞くや夜半の鐘
紙衣 新しう紙衣しにけり御霜月

足袋 我が紙衣水の翁や笑ふらめ
紙衣着て紙子臭いと云はれまじ

湯婆 寒天や竿に吹る、足袋木綿

炬燵 京の地を離れて見るや紺の足袋
足袋ぬきて心をのばす小酒かな

湯婆 曉のなまなかつらき湯婆かな
曉にふみ出されたる湯婆哉

炬燵 内に居ると答ふる聲は炬燵かな
夢鶴先生阿仁にいまし申されしを

雪 嘸な雪炬燵櫓を机かも
濡れ物に火燵とられし寒かな

屏風 鍼立て、腹を預けて炬燵哉

豆 家一つ軒で見ると炬燵かな
甘酒の晴る、日待つ炬燵哉

屏風 年どるか炬燵になじむ行脚僧
雪香や日に向く軒の竿の先

豆 屏風立て、居るや蘇鐵の冬くらし

豆 神鳴をうちけす豆のきほひ哉

冬籠 今日も亦大根臭し冬籠

冬籠 四五日は先つ面白し冬籠

冬籠 住まば都ちんまりとして冬籠

前書略

冬籠 冬籠古わんぼうに香も止めん

垂れ籠めて澁紙臭し冬籠

撫て見る顔の尖りや冬籠

爪髪もどる心なし冬籠

思ひよらの物貰ひけり冬籠

冬籠爪は碁石の垢だらけ

老母の別荘に参り

風よけの木のみ顔して冬籠

荷拵ひ包みこめるや冬籠

人の來て斯うもさせぬや冬籠

ちつとして居れば明るし冬籠

屋根のなき蛇もあるに冬籠

傾城の紺の合羽や冬籠

薫を常なる人や冬籠

物臭になる下地なり冬籠

吸に酔ふ酒にも遊ぶ雪見かな

許六にあやかり

雪車 雪車に寝て鎗つかせたる蒲團哉

柴雪舟に付て山家を出にけり

雪車に寝て年に瀬もなし淵もなし

殿原の犬にひかる、櫓かな

山の座主櫓おかしくはかれけり

蘆火吹く顔の見えけり網代守

網代守今年斗りと申けり

岡見 岡見する人は誰々日和山

體のあまきよりあらば岡見せん

善光は隣に聞くや餅の音

年 榎

來る春の爲に強かれ餅の足

搗くも取るもきたへよ神の大鏡

頭陀かけて餅搗く門を敷へばや

世に富めりされは萬戸の餅の音
馬もつら出すらん餅のあまた搗
餅花や子も幾人もあらまほし
百姓の藏に歌舞伎や年忘

琴によせて句を賣られ

一筋に年忘れたり十二筋
酒業の丹霞堂にて

少年行

親々の寢覺めは知らず年忘
物書いて紙帳に年を忘れけり
若き人の嫌はるも知らず年忘
能なしも人にひかれて年忘
根なきこそ年忘草おかしけれ
海老腰も舞ひけり年の忘草
旨きものに砂や年寄の年忘

月は斜雪の柳や年忘

掛乞

掛乞の間違ひたる水鶏かな

麻賣

麻賣のなれも子あるか妻あるか

年用意

煎麥も年の用意や茶の代り

年の市

古硯年の用意に洗は、や
仙人の着る物買はん年の暮
年の市布袋の袋かりて出でん

長病の歳暮

煤拂

身一つの煤拂ひけり袂囊

煤掃いて新に白し一萬度

己が身の煤は拂はで陰陽師

瓢を贈られ

煤掃いてふくべにも名を取らせばや

夜の繪を雪に書ばや煤掃

煤掃や斯うして見れば廣い庵
掃て見れば無きにもあらず庵の煤

年柴

年柴も足るや梅の薄こぼれ

かまはらひ

かまはらひ猫も箒の序かな

年守

年守る夜梅持來る使あり

惜年

年を守る我を鼠や笑ふらん

翠羽追啓

春待

春の來るやうす覗かん遠眼鏡

赤うせよ春待夜の有あかし

得たるかな花の春待つよしの榎

春を待つ力を得たり梅の杖

春の來る風見に下げん鴨の羽

江戸より送られ

安々と春を迎へん長壽臺

動物

鶯子

藪道や鶯の子の一人なく

鷹

海巖白日寒
崎風や海吹澄みて鷹の聲

山城公葬送

鴨

放されし鷹も放れぬ哀なり

黒鴨も羽白に雪の夕かな

鴨鳴くや沼草あれど月かすか

片寄りて芥流すや鴨二つ

小鴨鳴く水ふむ道の夜明哉

月の弓入か、る方や鴨の鳴く

月ゆれて水ひそかなり鴨の聲

山かけや出水に遊ぶ鴨二つ

遠淺や鴨のすり飛ぶ夕明り

市見過訪

寢覺むらん木の葉の時雨鴨の聲

鴨鳴くや一雪消えし田の穡

前書 畧

寒鴨や我が足長うして寒し

日の暮やまぶし構て小鴨釣る

鴨た、く人ほしがるや草の庵

老 懐

浮寝鳥 浮き鳥に寝られぬ家に寝て見せよ

新川に鮭引

千鳥 夜網引く聲も交るや川千鳥

旅僧の晝

木の端や炭で物書く小夜千鳥

荒来るや海の音聞く川千鳥

休まる、柳もあるに川千鳥

浦家 夕

千鳥鳴て榎吹散る夕かな

實栗飛ぶ風の中鳴く千鳥哉

あなかりに水にも棲まぬ千鳥哉

吹さらし河原表や鳴く千鳥

荒れ霜や寄不ふまへて鳴く千鳥

田の中の揚土に鳴く千鳥かな

石原を走りし兼てや鳴く千鳥

蕎麥糠の細溝川に鳴く千鳥

石原や千鳥味ふ雨たまり

水難る古江の千鳥聲や星

曉は潮どかへるか川千鳥

小夜千鳥小篠の雪かよる波か

葉竹立つ若瀬日暮て千鳥鳴く

立かけの馬にかするや磯千鳥

鳴交はす千鳥や小夜の舟鼠

千鳥鳴く小雨曇や大根船

耳からか湖南の千鳥聲するか

石經の崩れを鳴くか磯千鳥

枯蕎麥や雀は鳴がす鳴く千鳥

鬼北や千鳥を雨と吹飛はす

一つ千鳥翅を病むか脛病むか

むら千鳥今の霞に打たれずや

田の中の石に友なき千鳥かな

鴛鴦の後ろに長し水の皺

鴛鴦に毛鞘をしたる若衆哉

愛といへばその顔なり鶺鴒

過足 輕町

鶺鴒鳴くく、黒き梅嫌

己が音も音と思ふにや鶺鴒

日のかする冬田を雁の歩みかな

冬の雁博奕うつと見ゆる哉

青空に一むらぎの飛ぶ淋し

吹晒れて鳥叫ぶ夜の月白し

土崎にて

冬鳥 浮身等がから粉に鳴くや冬鳥

寒卵 小財布に五つ斗りや寒卵

河豚 河豚喰ふや昔しは袖に包みしと

河豚 河豚喰ふてさかなく人の申しけり

京の町に河豚喰ふ人を指折りぬ

剥けば猶河豚恐しき目玉かな

ふぐと汁意見の利かぬ世なりけり

世の中に鯛は見捨て、河豚汁

冬 冬 鮭の田水に黒む行衛かな

鮫 鮫 子を抱きし夫婦を憐み
瘦鮫や幾瀬の時雨越え來つる
鮫鮫のなまけし形や寒の雨
日くらみや鮫時の蹄冷

鮪 鮪 鮪の淡きに飽かん人もなし
人立つや初鮪のなくれ聲
鮪の劔見せばや遠つ人
浦さびぬ有るか無きかの冬鮪
波の間や見るさへ寒き鮪網
生きたいとも死んだともなき海鼠哉

海鼠 海鼠 汝かふつ、かなるを
蕨餅煉り損うた海鼠かな
起きぬぞ海鼠と人の云はゞ云へ
幾端に浪の捨たる海鼠かな
砂へたや馬の蹴て行く赤海鼠
赤海鼠黒きより猶哀なり

牡蠣 牡蠣 物言へば感寒し
口閉ちて浮世は清し牡蠣の水
牡蠣ごりの影さへ寒し岩の月

落葉 落葉 吹込んで井の水くらき落葉哉
落葉焼く中の匂ひや枳根
榛の猶しばみたる落葉かな
月凄き潮や落葉の逆流れ
落もせず葉に風光る樟かな

朽葉 朽葉 訪はぬかな花さし穴の朽葉水
朽ぬ葉を拾うてけふは物書かん

木の葉 木の葉 雨うち木の葉の朽て窓暮ぬ
木の葉火の淡きを庵の遊びかな
前書 暑
婆よなふ今は木の葉を桐炭
轉け來る木の葉よ我に物言へか
木の葉巻く颯より出る兔か
幾日明けぬ細戸や積る濡木の葉
池水や木の葉沈みて魚靜

枯林 枯林 摺鉢の中に淋しき木の葉かな
月赤くもるや枯林の平林
前書 内消紅舌長の建し翁碑を拜し

冬木 冬木 淋しさを見ばや冬木の梅の月
月細し冬の木立のされる音
磯山やなくれ生たる冬木立
高枝の折れてかゝれる冬木かな
寶鐸の音からびけり冬木立
刃き夜の月も尖るや冬木立
浦里やよき家見えて冬木立
鶯の歸花ほご鳴きにけり

寒梅 寒梅 榮蝶に梅生けたる露に
むづかしの戸をこぢあけて寒の梅
寒梅に赤ら目するか鏡磨き
前書 略

冬櫻 冬櫻 心にて見れば花あり冬櫻
飛彈萩原今井古郷の冬櫻に
冬ざれや神代も聞かず櫻華

寒 梅 如何に僧菽穀かけし冬櫻
留主守の能う保たれし寒椿
公時や中剃り捨て、寒椿

東貫老人の風調に倣ふ

茶の花 日の暮に茶の花さけて戻りけり
茶の花や人あと慕ふ油鶏

送 扇 峰

梅 嫌 茶の花に心の熱をさませかし
面白きもときや雪の梅嫌

八っ手 てらくと八手を這る日影かな
水仙や蠟かど見れば一雫

竹筒にこめれば

水仙や江戸より來ぬる赫奕姫
床の間の水仙旨し干菜汁

江戸より得て

水仙に佗しき宿の油煙かな
清少の枕によせて

江都より水仙を得

水仙や寒天に人堪る時
題 楊 貴 妃

三千の草は香もなし

水仙花 水仙や夜は秘め置く箱の内
花に葉に冬草ならず水仙花

五尺たつ人より強し

水仙花 無能老身
枯木槿 枯葎のある淺ましき木槿かな
枯皂角 青枯れて皂角残る梢かな

合歡實 合歡の實の枯ふる風の岡邊かな

冬 菌 あるものと思へばこそや冬菌
寒 菊 寒菊や隙になりたる 榊 杖 瓶
枯 菊 菊枯れて風のみ敲く竹戸かな

父那波氏三十三回忌

菊幾霜枯ぬ命を手向かな
枯菊を夜のすさみや影法師

菊枯れて京へ出らる、夫婦かな

刈蕎麥 刈蕎麥のまことの新をさ、けはや
草 枯 草枯れて風凄々し山の骨

しら／＼と草の枯蘗や目の斜

枯 薄 墓前にて
父母の我を撫るか枯薄

終に行く道は是かよ枯薄

枯 尾 花 此の塚の筈に折らん枯尾花

兄の墓前にて

枯 萩 枯萩や折るも折られぬ雪の花
枯 蘆 枯蘆や岩を離れて水を吹く

大根の肩ぬき出して雨寒し

葱 葱賣雪打拂ふ袖もなし
葱の葉の僅に青し寒の雨

葱汁もいとひはあらし風雅佛

冬 雜 葱の香や末た寝ぬ家か雪の月
枯 菜 枯菜いつまで人に取付くぞ

生鯛や冬氣も見えず日の光り

下窓や冬傾城の針仕事
一人り二人り扇遣ひや冬歌舞伎

冬の來て罌の雨りの直りけり

手にはめて淋しや冬の花鉢
冬蜜柑暖めよ鶴の腋の下

作者小傳

吉川五明 久保田城下(後の秋田市)巨商那波祐祥五男、幼稱伊五郎、後庄九郎、最後に宗七郎と改む、諱兄之。五代目吉川總右衛門宗順禪養子となり、其の宗家御山師(銅山方請負業)六代總右衛門未成年に付後見す。總右衛門獨立の後、分家して隱居し、了阿と稱す。子伊右衛門(春朝)に家業を繼かしむ。家業は荒物業(茶紙等商)を營み鎮守矢橋山王神社(今の日吉神社)の統人(大祭年番)にて巨費を要す、富豪にて信望ある人之に當る。たりし程にて、其の富豪たりし事以て知るべし。俳號五明、別に了閑、半居士、披襟舎(矢橋に隱棲せる時)十二方庵、虫二房二世等と號し、小夜庵を以て最も行はれ、後に鶴頭叟、樟圃等と稱す。始め京師正木風狀等に點を求めしが、後に猿蓑集を見、芭蕉の「草臥れて宿借る頃や藤の花」の句によりて始めて正風を會得し、天明の俳風を再興せり。藩主佐竹義和公(天樹院)に草庵を訪はれ、祖翁親筆の一軸を戴き、東家佐竹義富(九皇子)父子に出入し、殊に村瀬栲亭のため、三都に在らば、詩書畫三絶に名を擅まにせんと稱されし益戸滄洲(俳名巴釣又巴丁)と親善し、本藩第一の漢詩人たる吉田夢鶴とも交遊せり。播磨の玉屑來訪し、彼の「降る中へ降込む音や小夜時雨」の句を二條治孝卿の高覽に供せしに感吟の餘唐橋殿染筆の「小夜庵」の遍額を贈はれり。中央に師弟の關係其の他の連絡なきも、四方行脚の道を訪ふもの多く、奥州鬼柳の子日庵一草は、連句に於ける戀の附句は情よりも姿よりすべしと教へられ、蕪村作句の態度と同一(六十にして始めて戀を知れりと歎せり。實に天明時代における東北の名星にして、獨り中央の蕪村、曉台等に再興の功を専らにせしむべきでない。享和三年癸亥十月二十六日歿、年七十三、矢橋歸命寺に葬り同村寶塔寺に句碑を存せり。

附錄 翠羽句集

安藤和風編

春

時 候

今朝の春 松葉色の衣着初めて今朝の春
初 日 初日影松吹く風も匂ひぬる
くだかけの聲も長閑に初日哉
如 月 萬歲に燕舞ふやきぬさゞぎ
遠山を栗りに立つや初 霞
日の海に入相の霞靜なり
霞みては花と見えけり風 車
初霞先つ海の音遠くせり
空も早や霞きはつく海の末
河の邊の狐嫁入るか夕霞
長 閑 處々軒の羽虫も長閑なり
麗らかや雪あり乍ら松と竹
陽 炎 陽炎や燈心草の長 短
陽炎に雪の行衛もうたかたや
臘 月 陽炎に初草の道目はちりぬ
取とめて鳥も鳴かず臘月
春 風 春風やおしかひ鳥の尾のしだれ
鶴 鶴の幾田わたりや春の風
八幡社にて清水を汲み
春 日 さ、れ蟹 笹葉に乗て春日哉
やんことなき御方の御點を頂き
數ならぬ草さへ光る春日哉

春光 久方の光りは春の光かな
目に玉の光や春の庵の壁

春の雪 我が身にもしむ思ひかな春の雪
雁かねのうらみ鳴らん春の雪

春の野 さらくと春近き雪降りけり
春の野や棲とり乍らこ、かしこ

春の野に茶ひんを置、厭はれぬ
病中吟

春の雨 手の筋のあらはになりぬ春の雨
春雨や柳を宿る遊虫

いとけなき草見に出ん春の雨
忙しき心流すや春の雨

春雨に眠を覺ます本草かな
猫の足洗うてやらん春の雨

春雨に花鳥見ゆるうた、ねや
しごくに帯を締めけり春の雨

何見ても等閑ならぬ春の雨
春雨や物まざくといへ鳥

春の夜や月もかすりて鳴く鴉
春の暮 鐘をさへ心のばすや春の暮

惜春 春惜しや山吹交しる小米垣
行春や山より奥の山の色

人事

松飾 はとふ膳そなへ向けて松飾
詠初 新しき家に響くや詠初

筆始 明けて吹く風も匂ふや筆はしめ
風 是も囀る類ひかな

風苦になる音もなかりけり

七草 七草や蝶のまがへる袖の雪
一人前の人こそ稀ぞ若菜芹

鈴菜 朝ほらけ心浮き立つ鈴菜哉
苗代 苗代にうつらふ月の動かな

涅槃會 涅槃會に車の音もしめりけり
涅槃と降る雪さへもしめりけり

貝桶の蓋身も雛のかざり哉
鶯合 桃の日や桃も厭はず鶯合

鶯合 桃の日や桃も厭はず鶯合
桃の日 桃の日は桃色顔の多かりき

百敷はけふ桃色の色紙かや

動物

猫の戀 忍びても名は立つものを春の猫
春の月今宵も猫の戻らぬか

鶯のよすが聞かばや薄曇
むら竹に鶯鳴かば籠らばや

鶯の聲より賣るや花細工
鶯の二とせ来てよ愛々し

鶯や藁屋に袖はかざぬぞ
尖りたる聲とは違ふ雉子かな

雉子 雉子鳴くや庵地交りの里の畑
雉子鳴くや庵地交りの里の畑

雲雀 さやかにて目にはかち鳴く雲雀
舞ふ雲雀野に出て心ほこせとや

たとし道も雲雀に馴れ來つる
二つ三つ柳はちきて飛ぶ燕

雁かねの別れ頃なる雨夜かな
花の枝算ふる蝶の忙しき

春行も知らでやねぶる草の蝶
夜に入れば猶うき事か鳴く蛙

蛙 晝の蛙空さうげなく鳴にけり

降るとては鳴き晴るとて鳴く蛙哉

植 物

福壽草 明けて今朝扇の繪さへ福壽草

神棚にさ、けもすべし福壽草

若 菜 厭はすも手出し歩行くや若菜賣

年始に後れ如月小夜庵を訪ふ

初 草 雨をもつ春の初草目につきぬ

春の草 日ぞ戦く春の川邊の草の艶

江戸よりの摺物に挨拶す

久方の光りは芽立つ春の草

青草やめさます今朝の雨の跡

梅 雨の粒苔の梅に交りけり

白梅や朧ながらの花の數

白梅は散ても色のさめぬべし

春のすさみ

かをれよと梅折入れつ御所文庫

梅咲ぬ短尺書て飛しめん

梅か香に出處なしかけ丸御月

白梅を磨出す月の嵐かな

祖父幹齋五十周忌

梅の匂ひ引くや緑の茶の手向

風の來て春告草のさそふらん

いとまは梅のこほれを拾ひけり

柳より離れて雨の見えにけり

草臥も見えぬ柳や風の跡

青柳や風にゆれなす日の斜

青柳の糸いふ雨や染つらん

風に手のあるか柳の糸をよる

青柳や夕日さしこむ門の内

青柳に白かねの月出しかな

朝日出て柳の糸をす、きけり

遠山のかけひく水の柳かな

青柳にす、かせんかな小蛤

青柳や我かます事のあらしくし

杖つくく遠山櫻詠めして

こゝりく朧なる夜の櫻かな

月影の窓に櫻を呼ぶなるか

人々櫻の名よせを申されければ

花とさへいへばと櫻と覺えけり

緋櫻や眠りをさます雨の跡

空色も淺黄櫻の目につきぬ

花の塵降飛そ、りけり庭の隅

風の手のあるか並ぶる花の塵

花も雪とより行くものを身の愚

花の散る鴛鴦も來よ庭の池

花の塵吹いて遣らばや蟻の道

散る花の日さあはれにこぼさや

反橋の朱もいみしや花曇

かはほりの誰にか忍ぶ花の暮

二見瀉の石

石二つ是やふたみの浪の花

薄着する斗りも嬉し花の朝

夕つく日さす物毎や桃の花

夕雲やけふ白桃の花にほふ

玉水のかゝるや山吹たへなるや

海棠の夕雨恨む顔なるや

白躑躅夜に入て又静なり

月さして間毎明るし白躑躅

殿たちの引くものとしてや犬躑躅

附 桃の花

董 風や厭ふ雲雀隠れつ董草
摘て後よしなしと思ふ董かな

當麻の董

染殿の葉の色なるか花董

八丁暖眺望

春 雜 いつことも春白浪や松の末

新藤田村下に眺め

くたかけの聲も光るや春の里

柴刈に春咲く草を尋ねばや

春深く雨の見するや草の色

在原寺竹

此君の春とて色やこほれけん

夏

時 候

夏 初 雲紙や夏の初の空の色

さめて今朝夏となりけり花の夢

春 隔 春隔つ夜とて見にけり花の夢

宜祥寺父母の墓に詣で

青 嵐 日は川に光り乍らも青嵐

島山や波渡り来る青嵐

風 薫 月うつる臺ナに風の薫りけり

古川のほとり

夏の山 川水の二藍なるや夏の山

夏の川 夏川の音して風の通ひけり

夏 野 日の暮て野は慥なり夏の色

青 田 静さを疊敷たる青田哉

泉 月影を緘にさらす泉かな

五月雨 くたかけの聲さへ濡るゝ五月雨

梅 雨 ごう傘を向けても濡るゝ入梅の雨

梅 雨 かすりくゝひかきと降るゝ入梅の雨

此のやうにしほりて見は入梅の雨

雲の峰 風に心あるかたなびく雲の峰

夕 立 夕立のあとは空色のちゝみ哉

夕 立 夕立の雨をたへん瑠璃の鉢

涼 し 涼しさやうつらふ影も燕子花

小 唐 葵 蜀葵よりも涼しさよ

御城内八幡社へ参りて

見下ろせば海に續きて田の涼し

風に水のうねくゝて日の涼しよ

新しき門

休らへば松風涼し門の下

毘比羅のほとり

夕 蝶 やいと長う涼し松の影

は、き、や 雨の亂に跡涼し

涼しさや水にまかせる藻の長さ

月涼し露もつ草や風持つ草

風呼びて秋待つ虫の聲涼し

夏の暮 海岸のひそかに赤し夏の暮

人 事

更 衣 雀さへ身輕に飛ぶや更衣

更 衣 びいごろの文鎮置かん更衣

親あれば夫あれば身も更衣

花御堂 いく人の茸てやか、る花御堂

菖 蒲 風そ匂ふ宮も藁屋もあやめ草

今宵出し月もあやめの姿かな

藥 玉 藥玉のたまれる見たし夢にだに

繪扇を土産に貰ふ

競 馬 繪にさへも目のさめるを競べ馬

競べ馬さればさうぶの日にけり

幟 竹長々し世を祝ふかも

水 餅 氷餅朝日涼しや錫の鉢

蚊 帳 氷餅白きに我もあやからん

いかに嵐顔へかけるぞ 躡の足

夫に別れたる時

蚊 三角に吊ても寝られぬ 獨蚊帳

打水 薰の蓬に交じる蚊遣かな

打水 打水や心涼しき 玉 簾

打水 打水に柿の葉光る涼しさよ

川遊び 水巻を魚に作らん 川遊び

團扇 月のうつる團扇に風の薫りけり

竹婦人 よき中を隔てはしすな 竹婦人

抱籠 抱籠に石竹入れて眠りけり

抱籠はしらくしげな名なる哉

晒井 晒井や底を流る、雲一つ

晒井に見るや我が顔人の顔

動物

時鳥 親切に待つ人は聞かて時鳥

時鳥 棚雲に入て鳴かよ時鳥

時鳥 さしながら月の床しき時鳥

時鳥 時鳥夫も枕の神かけか

時鳥 野の雨や山薄う見ゆる時鳥

時鳥 臚氣の都の夢や時鳥

水 鶏 水かけの夜放れを鳴く水鶏かな

青 鶯 青鶯や影のすむまで水を見る

螢 かわゆさや言はず心をやく螢

螢 川の邊は袖にも止まる螢かな

螢 夕風の菖蒲より飛ぶ螢かな

夏 虫 宵々や哀れを見する夏の虫

夏 虫 哀いかに夜な〜見する夏の虫

夏 虫 風につれて耳をとふすや蟬の聲

夏 虫 蟬鳴いて暫し扇も忘れけり

夏 虫 大空の直り口なり蟬の聲

夏 虫 慰みに角や出すらん 蝸 牛

夏 虫 慰みに角や出すらん 蝸 牛

水 馬 すみかねて忙しき身や水 馬

植物

殘 花 蝙蝠の羽も厭はる、残る花

若 葉 日のさして見るもの青き若葉哉

若 葉 行人の顔も扇も若葉かな

若 葉 たよ〜し若葉に宿の日の盈

若 葉 いと、さへ若し若葉の小雨ふる

葉 櫻 葉櫻やたま〜花の片足貝

葉 櫻 葉櫻に月の嵐の渡りけり

櫻の實 愛ありや片顔赤き櫻の實

若 楓 誰か爲に爪紅さすぞ若楓

若 楓 若楓日かけさらすか水の音

夏 柳 幾人か夏の柳の蔭たのむ

叔父五明が小夜庵の額を孫が他より購ひ持來りしを拜して

橘 橘の昔し薰るや宵月夜

南天 南天花や玉水添ふる夏の雨

夏木立 南天の葉にもたれなば雨も花

夏木立 風もやと暫し立ちけり夏木立

卯の花 卯の花の雪見に出てん紺日傘
 月の兔 卯の花雪に眠りけり
 卯の花の 雪の光りや月の影
 卯の花を 幾ほと照らす流かな
 いつとて卯の花の雪きはぞなし
 卯の花の 朝明月の淺黄かな
 夕山に 卯の花の明り届しや
 卯の花のしら、にこ、ろ東雲や
 白雲は卯の花の氣より立やらん
 卯の花や葉のあるなしの雪の下
 月の雪卯の花の雪に積りけり
 若竹 若竹に心延はずや雨のあと
 若竹に 丁子油をひかんかな
 竹の子 竹の子や親の齒音の頼もしき
 牡丹 あまさかるか、る國にも牡丹哉
 夜光る 花の匂ひや白牡丹
 月に香を 包みて眠る牡丹かな
 夕影の 露こぼる、は牡丹かな
 芍薬 日和風芍薬開く匂ひかな
 燕子花 いかにか花賣夜雨晴たり燕子花
 花菖蒲 かほよ花 詠めて月の睡りしか
 今朝の風身にもふればや花菖蒲
 玉巻芭蕉 玉を巻く 芭蕉涼しや 雨雫
 芙蓉の花 いはらとは思はれぬ風の薫かな
 撫子 撫子の花のあはれや河原にも
 石竹 石竹や雨にもさめぬ錢さらさ
 苔花 朝月の露に碎けり苔の花
 是も月の露の宿りや苔の花
 苔の花曇る日としてはなかりけり
 川の邊や 暑き凌きに麻むかん

蓮 見る内に長うなりけり麻のたけ
 吹おろす 山根の川藻 戦ぎけり
 蓮の葉に 水玉入りし 浮世かな

秋 時 候

夏 残 名にめて、左右に残る 夏景色
 薄井村
 秋 立 秋立ぬかほよまるめはとれよき
 初風 常もふりを身に知る朝の風かな
 朝風 朝風の寒さにち、む山の雲
 天の川 空よりも水に長しや天の川
 水草に 流れとまるや天の川
 つめたき つめたくて蒲菊捨てしか道の端
 秋の風 一雨の 早や身に立つや 秋の風
 花薄すはる間もなし 秋の風
 河水も 押されて行くや 秋の風
 我にさへ 秋の日寒し 老の身は
 秋 雲 鴉と鷺の飛立陰や秋の雲
 霧 朝霧の 山の木立やみやびやか
 切石村
 辛崎の松
 辛崎や 露をかつらの 松の色
 高岩山
 露 露けきに 坊か巖は 爐も進む

八 森
晝も星飛ぶに露照る宮の杉
向野や露や漕行く山の人

秋の山
露こぼす松に御堂のしるしかも
草臥も忘れて来ぬれ秋の山
花遠しと、めて見たき秋の山

花野
敷渡す岩山小貝の花野なす
名月や雁も崩れず海の上

月
名月や凄しさうなる豆畑
名月は薄にかざす扇かな
都見し人に尋ねん月の照

荷上揚村
紫の石見返れば晝の月
七倉村
籠山やはさんだやうな十日月

桂の花
京の文桂の花を影に見ん
子の一周忌に

秋の暮
萩の花物あじきなし秋の暮
日の海に入相の空や野の色も

七倉天神
秋時雨 うき島や秋時雨とも一しきり
小春近 遠沖や小春に近き帆の据り
訪小夜庵
秋錦 綿ぞと櫻蚊もいて、舞やらん
小繁

漕く錦 秋つなきたし舟の綱

秋され 秋されに浪かけ合ふや岩の間
秋名残 絶々に虫鳴く秋の名残かな
行秋 草木さへ行秋惜しむ風情あり
行秋や物音が、る針の先

人事

星祭 水の面に盈る、星の夜ぞ静
七 夕
嵐さそう 琴の調べや天の川
星うつる金短尺を手向かな
漏刻やさ、けぬ水も星の池
立琴 立琴を人に忍びて鳴らしけり

高岩山男女御殿
織姫 織姫の爲か峠の目籠石
鵲の橋 鵲の橋や石より金より
魂祭 賑やかに飾りて悲し魂祭

鶴形村
毛見 鶴鶴も毛見先立に田こしかな
月見 厭ふたる梨をちろして月見かな
月見れば世に浮雲は数ならず

高岩山
稻刈 土足を稻刈濯く渡りして
刈田 海白し夏山越しに刈田敷

瀧澤山
山田刈る 聲や手に取る風の筋
茶種蒔 茶種蒔まだ夏草の畑へり

動物

蝸 蝸よ日暮は物の世話しなき

小入川 秋 秋知らぬ蟬の時雨る、石川原

虫 虫の音袖をとふすや獨りこち

戀の題 松 松虫の聲を待つ夜の力かな

鈴 鈴虫は草のやとりのあるしかや

秋の蠅 鈴虫の音は幼な兒の笑ひかな

鹿 鹿 海士の子や燈心廻はす秋の蠅

山 山里の夕や霧に鹿の聲

鹿 曉の風や身に立つ鹿の聲

翌ならで何も見ぬ日を鹿の鳴く

渡り鳥 夕くれや霧のひまより渡り鳥

色鳥 色鳥の野をなつかしみ暮るまで

五十雀 茂浦小鳥 我か供は貝をせゝるよ五十雀

鶉 鶉 朝晴や曇なきけに鳴く鶉

雁 雁 月落る薄より鳴く鶉かな

雁 秋もまだ一聲足らぬ鶉かな

雁 能くとれる寝巻の蚤や朝鶉

雁 雁かねや心晴れたる山の形

雁 初雁や枕に浮む見ぬ堅田

雁 柳雲や上は澄行く雁の聲

雁 夕雲や亂れては雁の揃ふ聲

雁 切石渡し場 紅の輪をなす棹に雁の聲

荒鷹 荒鷹の白眼返すや岩の浪

鵜形村 鵜 鵜さびて川の底まで澄む事よ

植 物

朝顔 朝顔は月日の間に咲にけり

萩 朝起も朝顔過て起き易し

萩 月さして障子に萩の盛りかな

萩 前書略 萩枯梗

萩 十斗り我より若し萩枯梗

薄 風の姿つくらふ露の薄かな

薄 我に似て淋しき縞の薄かな

薄 花薄月のうしろにもあるやらん

薄 かくばかり折れと迹なし花薄

尾花 時ならぬ雪の尾花や沼の鷺

比井野村 比井野村 五器籠る日の照り返す萱か軒

萱 萱 茂浦へ出發 馬舟に紫苑並ひや女かな

紫苑 紫苑 露こぼす小風に菊のうきかな

菊 菊 朔日の岩に早咲く星見草

草の花 草の花夫さへ散らす風が吹く

飛根村 飛根村 山岸に誰待て立つ男郎花

男郎花 男郎花 とりしめぬ風の姿や女郎花

女郎花 女郎花 秋風を知らで咲くかよ女郎花

角力草 角力草 七倉天神 銀杏山

紅葉 紅葉 其神のおはせばこそよ梅紅葉

水澤橋 水底の石も紅葉や濃く薄き

夫婦銀杏 夫婦銀杏

附 翠月可集

木の實 いとまるふ木の實育つ此の乳や

高岩山

栗 高岩の足休めとや栗 茸

茸 岩館や茸並びの小家敷

七倉道

粟 畔道や栗穂咎めて桐油打つ

高屋野に休み

今年豆粉 旅徳や金子もきなこも今年物

躍り髪結うてやるとて

秋 雜 稚な子の髪さへけさは抜ける秋

雨に猶木末の秋ぞうき姿

逆毛立つ秋の梢の烏かな

涼風の變り目さすや大根の葉

七倉天神

山鳥や秋氣に夏も大投石

一つづ、わけて五色の倉の秋

親しきも遠きも秋の日ざしかな

秋ならぬ眼洗水のうすぬるみ

山陰に雲も晝寝や秋日和

冬

時 候

小 春 いさましや雀の聲も小春とて

櫻蚊も遊びて窓の小春かな

小春とてみとり勝なり山の雪

何思ふ小春の雪の夕たまり

復かせ紅葉流る、小六月

冬 小六月 日の障子冬と思はず蠅の音

冬 冬 日の出草冬とは見えす 雨の中

飾りせぬ女に似たり冬の月

臙なる夜しもありけり冬の月

冬 冬 鶴幾つ立つや白波冬の海

小夜時雨しばなく雁や海の音

初時雨白き薄の穂ぞ淋し

夕知らぬ時雨の空や浦あかし

五明三十三回忌「小夜しぐれ」集板行

時雨には今も昔もなかりけり

何思ふ時雨の雲の夕たまり

風や屋根越しに来る海の音

風に浦邊の人の聲もせり

菊の葉や初霜もちて猶青し

けた、まし障子に名残る初霰

ふりて行くあとさりげなし初霰

さりけなき霰のあとや松の色

幼き子の雪かくを見

愛らしや小松の含む玉霰

目ざましや松に垂たる今朝の雪

庵の夜も思ひ出らる、雪の月

寒けれど子を遊ばすや門の雪

かまきり雪もうつるやさるすべり

人の思ひ積らは如何に今朝の雪

松の葉やつまんだように今朝の雪

慰みに南天の雪ゆすりけり

初雪や物押しして見ん椽の先

のはつそりと見えけり夜の雪の松

かはゆさや吹雪にまふれ鳴く雀

清小納言の古事を思ひ

初雪や御殿の人はいかならん

伯父の庵を訪ね
薄烟炭とは見えぬ雪の山
夕暮や遠山松の雪の花
いかならん雪の三笠の山の形
辛崎の松は雨だに夜の雪
伯父の廬を訪ひ

叩き兼ねつ柴の庵の雪の花
初雪や草木さへ手に取ると見ゆ
夕つくやすみかへりたる雪の山
俳席の人々へ申す
松の雪花となるなら下枝にも
白雪の一ふしの間に降りにけり
幸壽丸塚の苔

寒
塚の雪いとくに丸く見えにけり
新しき足駄の音の寒さかな
朝息の恐ろしう見ゆる寒かな
落付ぬ音の寒さや草はつき
薄氷焚火に立て、見る子かな
焙りてはつたなき草の氷かな
ちりひちの積りて煤の師走かな
月斗り静に見ゆる師走かな
師走さへ女使の長々し
組板の敷をならへて年の暮
かせ糸や手錘もまはる年の暮
手に縫ひたるを伯父小夜庵に贈るとて

米 薄
焙りてはつたなき草の氷かな
ちりひちの積りて煤の師走かな
月斗り静に見ゆる師走かな
師走さへ女使の長々し
組板の敷をならへて年の暮
かせ糸や手錘もまはる年の暮
手に縫ひたるを伯父小夜庵に贈るとて
松の葉の心のべけり年の暮
年暮や松の葉ならぬ心ばせ
手をあふるひまさへ惜し年の暮
春に返す小袖の塵をくし拂ひ
春床し鶯袖の切細工

人事

鉢叩 風に向うて来るや鉢叩
煤拂 此のやうに心もちたし煤拂
年の市 松をさへ姿見らるれ年の市
春待 夜ぞ淋し待てばや遠し花の春
厄拂 忙かしき中から呼ふや厄拂

動物

鶯子 鶯の子は枸杞の實に遊ぶかな
千鳥 屋根越しに来る日は寒し浦千鳥
鶯鶯 鶯鶯の思ひや氷る夜の池

植物

木の葉 いろ／＼の青葉に松もうつろへぬ
日のさして木の葉錦す霜の跡
冬木立 日のさして山わがりけり冬木立
照りもせず曇りもやらす冬木立
浦ならで浪の音する冬木立
寒の梅 暖めて色氣遣ふや寒の梅
水仙花 寒からぬ姿なりけり水仙花
枯菊 菊枯れて隣は遠くなりけり
柊の花 柊の花の寒さやこぼれ米

作者小傳

◇三輪翠羽 久保田城下商賈升屋祐從女にして五明の姪なり、名は久女、別に揚鏡と號す、十四歳にして父に永訣し伯父五明に養育せられ和歌、俳諧、書道及裁縫に詳し、始め土崎の加賀谷紫石に嫁せしも、琴瑟相調はず、後能代三輪良弼に再醮し、夫と共に帷を垂れて子女を教育せり。其の文才を稱されて「權少納言」といはれ、淑徳に感せられて、「三輪のあ媼さん」と尊敬さる、俳句も五明の感化を受け風調優雅なるも、遺稿の存せざるが爲めに、遺句の甚だ多からざるを遺憾とす。弘化三年正月十八日、八十歳を以て歿し、同地淨明寺内祖先骨塔に埋む。
著書「早苗歌」「春の神垣」「小夜時雨」(五明追善)等。

昭和九年六月廿五日印刷
昭和九年六月三十日發行
定價金參圓
編者 安藤和風
發行兼印刷人 加藤俊三
印刷所 秋田郷土會印刷部
秋田市上中島本町三十一番地
發行所 秋田郷土會
振替口座仙臺二三九八番

安藤和風先生編著
○秋田の土と人 金四圓
○秋田勤王史談 金貳圓
○秋田五十年史 金壹圓五拾錢
○秋田人名辭書 金參圓五拾錢
○和風歌集裸 金壹圓
○和風句集仇花 金壹圓
○和風俳句 昭和九年一月創刊
一年分金六十六錢
秋田市上中島本町三十一番地
發行所 秋田郷土會
振替口座仙臺二三九八番

